

近世・近代移行期の大蔵書 和歌山県立図書館所蔵「濱口梧陵文庫」

松 本 泰 明

はじめに

濱口梧陵（一八二〇年～一八八五年）は、諱は成則、通称は儀兵衛。ヤマサ醤油七代目当主にあたる。紀州有田郡広村の出身で、経世済民を志し、佐久間象山に入門し、勝海舟や田辺太一、福沢諭吉等とは親しい友人であった。安政の南海地震の際の救助活動並びに自費での大堤防の建設が特に著名であり、また、和歌山藩政改革に参画し、初代和歌山県会議長に選出される等、明治期の和歌山を代表する政治家の一人である。その功績は、死後繰り返し地域や県政で顕彰され、昭和十二年には安政南海地震

の際の逸話を元に創作された物語「稲むらの火」が小学五年生用の国語の国定教科書に採用された。

「濱口梧陵文庫」は、平成二十四年に濱口梧陵の子孫から和歌山県立図書館に寄贈された梧陵自身の蔵書とされる書籍群のことである。その規模は五五〇点余り、冊数約五七〇〇冊、巻数一五〇〇〇巻近くにのぼる。

筆者は県立図書館に在職し、「濱口梧陵文庫」の調査を令和元年六月に開始し、約五五〇点の書籍から構成される「濱口梧陵文庫」の内、現在調査済のものは全部で四〇一点である。その内三四八点には「梧陵」「濱口氏成則」「梧陵濱口氏」「梧陵濱口氏蔵」「濱成則字公興」「南紀廣浦濱口儀兵衛所蔵記」等の梧陵の名に由来する蔵書印や

「黄篋園図書記」などの蔵書印が押印されている。蔵書印には一部梧陵以前の所有者のものと考えられるものも含まれるが、その九割近くに梧陵の蔵書印が押印されていることから大部分は少なくとも梧陵自身が所有した蔵書と推定できる。

本論は、主に二つのことを目的に執筆している。

一つは、令和二年七月一日から一二月二七日まで県立図書館と県立文書館合同で開催した濱口梧陵生誕二〇〇年記念「濱口梧陵と梧陵文庫」展で紹介しきれなかった「濱口梧陵文庫」の蔵書内容や蔵書形成の背景などを、新たな発見も含め掘り下げて紹介することにある^①。

もう一つは、全国的な研究動向も踏まえて「濱口梧陵文庫」の研究が濱口梧陵の思想形成過程を考察する上で、ひいては、近代日本史や郷土史を研究するうえで、どのような可能性があるのか展望を提示することにある。

文庫の調査は現在も継続中で、本論は文庫の主要な部分を検査した結果、判明したことの初回報告としたい。

濱口梧陵は、近代和歌山を論ずる上で欠かすことのできない人物の一人であるが、従来から濱口梧陵の研究に

は困難さを伴っていた。その大きな理由に彼自身に関する資料の限定性が挙げられる。

彼の人物像の基になっているものに、和歌山出身の新聞記者杉村広太郎が大正九年に執筆した『濱口梧陵伝』が挙げられる^②。『濱口梧陵伝』は当時現存していた梧陵の手記や講演録、書簡等の資料や関係者の証言等も収録された本格的な著作である一方、以後の研究もこれに資料的根拠を大きく依存せざるを得ず、全体的な人物像は『濱口梧陵伝』に依拠し、一部分を掘り下げて研究するという傾向が強い。近年、県立文書館HPでの「夏の夜がたり」の公開等により改善しているが、なお、大きな問題である^③。それを乗り越えるためには、まとまった量の資料発掘が不可欠である。

同様な資料の限定性は、地域史的な観点から濱口梧陵を研究する場合にも生じている。

宮地正人氏は、御坊の医師羽山大学が作成した風説留『彗星夢雑誌』の内容検討により、羽山大学や菊池海荘等紀中地域の豪農商が築いた全国規模で張り巡らされた情報網の存在を証明した^④。それにより同地域は豪農商によ

情報ネットワークが最も典型的かつ大規模に形成された地域であることが証明された。そして、この研究と前後して豪農商の情報網の存在を具体的に証明する材料として「風説留」が注目され、宮地正人氏、岩田みゆき氏、常松隆司氏などの研究により各地の豪農商等の情報網の存在が明らかになっている。⁵⁾

それらの研究を総括した宮地正人氏によると、それは「今日風の、情報供給↓情報流通↓情報需要といった図式には全く当てはまらない、発信・需要主体の全国的な成立という、社会史的な当該時期の特質を指定しないかぎり、風説留の全国的形成は説明できない」のであり、その社会段階の成立こそが、明治初年において近代社会成立に不可欠な新聞の社会的定着を可能にしたとされる。

そして、幕末期は幕藩体制下で、本来政治や情報から疎外されるべき存在であった豪農商や在村知識人が全国的規模において、独自にあらゆる政治情報を蒐集し交換し分析し、それをもとに自らの政治的位置を確認し、自らの政治的立場を創り上げていった時代と定義されるに至っている。⁶⁾

これらの研究は近代社会の成立過程を考察する上で画期的な意義を持つが、課題は残る。それはその社会的段階がいつ、どのような過程を経て成立し、以後の展開とどのように接続するか一連の流れを明らかにすることである。特にペリー来航以前は未解明な部分が大きい。

幕末情報論の専門家岩下哲典氏は「ペリー来航以前に既に日本全国には、江戸と直結した情報チャンネルをもつグループがいくつも存在し、それぞれがさまざまな情報をとり合って、彼らも知らない間に大きなネットワークが形成されていたのではないか。(中略)ペリーの来航情報は、個々のネットワークの容量をはるかに越える大きな情報であったために、個々のネットワークの壁がとり除かれて、より多くの人々を結びつけていったのではないか。それがいわゆる「近代社会」なのではないか。」と推定している。⁷⁾しかし、岩田氏の論を証明するためには、具体的にペリー来航以前に各地域で豪農商層のネットワーク化、政治主体化が進行した過程を立証する事例研究が多数現れる必要がある。

その際、「風説留」はペリー来航に刺激され各地で作成

され、新聞の成立により衰退するため、そのみに依拠するとペリー来航以前や明治以後の状況を説明できない。

研究の糸口は存在する。例えば、宮地正人氏は越中の事例でその地に強烈な情報需要主体が存在したことを証明する材料として佐渡家の蔵書「蒼龍館文庫」の存在に注目し、「そもそも情報蒐集は、高岡の佐渡家にも見られるように書籍蒐集と連動した、表裏一体の営み」とする。

また、桐原健真氏は吉田松陰の読書録を研究し、彼の築いた読書ネットワークの存在や彼の思想形成過程を明らかにした。⁽⁸⁾

宮地氏はあくまでも風説留主体の立論の補助として蔵書を利用したため深く考察されていない。他方、桐原氏の松陰の思想形成過程を証明した手法は注目されるが、下級とはいえ政治主体たり得る武士を対象としており、また、詳細な読書録を残す人物は少なく、そのまま応用は難しいという弱点はある。しかし、その手法は豪農商層の蔵書研究にも大いに参考になる。蔵書を詳細に検討すれば豪農商の情報需要主体化を証明する材料として利用でき、蔵書を縦軸に考察することで情報需要主体化の

過程が証明できる見込みはある。

羽山大学等が大規模な情報網を築いた紀中地域には、大規模な蔵書が存在する。「濱口梧陵文庫」である。

本論ではさしあたって「濱口梧陵文庫」の内容とその形成過程を梧陵青年期以後に絞り考察し、蔵書の活用の方や後世の知識人に与えた影響等を検討したい。また、現状「濱口梧陵文庫」の内容を深く考察した研究は見当たらず、詳細な報告は本論が最初である。その紹介の意味でも一定の学術的価値があると考ええる。

第一章 「濱口梧陵文庫」の構成

「濱口梧陵文庫」は全部で五百種あまり、巻数で一五〇〇〇巻近く、冊数約五七〇〇冊で構成され、「濱口梧陵文庫」の内、七割の約三九五〇冊を中国からの輸入漢籍が占め、残り三割の一七五〇冊が和本である。

「濱口梧陵文庫」の特徴として、蔵書の種類はほとんどが版本であり、かつ欠本が少ないことが挙げられる。これは、近世の地方文化人の蔵書内容からすると通例では

ない。例えば、近世後期から明治初期にかけての武州の名主野中家の蔵書内容を検討した小林文雄氏は「まず第一の特徴として版本に比べ写本の割合が極めて高いことが指摘できる。これは野中家に限らず、近世の農家で一般的に見られる現象である。版本の少なさはそれだけ書籍の直接購入の習慣が農村部に定着していなかったことを思わせる（中略）第二に、これらの写本は書籍の忠実な模写ではなく、写す主体の関心によって自由に取捨選択され、編集されており」とする。⁽⁹⁾ 江戸時代は日本独自の出版文化が花開いた時代とされるが、地域差はあり、地方では版本はなお希少な存在であったことがわかる。

第二の特徴として近世民間知識人の蔵書としての「濱口梧陵文庫」の巨大さがある。江戸後期の国学者足代弘訓の文集『伊勢の家苞』の江戸の蔵書家の順位をつけた記述では以下のような記述がある。

江戸にて、第一書物の多きは聖堂也。次浅草前守治郎兵衛也。和漢の蔵書十萬卷あり。號を十萬卷楼といふ。次阿州侯也和漢の御蔵書六七萬卷ありといふ。次塙氏也蔵書皇朝の書物二萬卷計あり。盡く好書に

て、無益の雜書なし。次朽木兵庫、御蔵本三萬餘卷あり。次古賀侗庵先生、蔵本一萬餘卷あり。號を萬卷楼といふ。⁽¹⁰⁾

梧陵の蔵書は江戸の大蔵書家達に匹敵する規模の大蔵書であったことがわかる。また、江戸期の大規模な個人蔵書の多くは現在散逸している。濱口梧陵の蔵書がまった形で現存するのは特出すべき点である。

第三の特徴として梧陵蔵書の七〇八割は漢籍であるが、その多くは中国からの輸入書である点が挙げられる。輸入書の流通の仕方を宮崎市定氏は以下のように述べる。

書籍の代価は他の商品と同様、日本人の目利、すなわち評価係りがいて、中国商人の意見も参考にせず、一方的に値段を定めて、長崎の会所、すなわち特許会社が一括して買い取ってしまう。ずいぶん乱暴なやり方であるが、それでいて中国商人はそれなりに儲けていたらしい。こうして買い取った本は、幕府や有力者からの注文品を除外し、あとを日本商人に入札させる（中略）商人が入札で落とした書物は、まず大阪に運ばれ、そこから日本全国に転販された。このさいに卸売

り商人、小売商人が手数料をとり、かつ運搬費は高くついたから、地方の読者にとって唐本は目の玉のとび出るほど高価なものであった。そこで個人が購入することは容易ではなく、多くは藩の学校に買って貰って、それを借りて読んだ。もっとも藩にも大小貧富があるから、大藩の藩学で、しかも大名の学問好きな所であれば、そうそう新しい本は買ってくれない。概していえば、富裕な西日本に藩学が栄え、同時にそこから学者も輩出したものである。⁽¹⁾

なお、梧陵蔵書五七〇〇冊中、唐本と考えられる書籍は四千冊近くに及ぶ。唐本のまとまった現存は、当時の地方の知識人の蔵書としては珍しい。

例えば、常松隆嗣氏は幕末期の丹波篠山藩の豪農園田家の蔵書を以下のように紹介する。⁽²⁾

園田家には一五六種類にも及ぶ蔵書が現存しており、これらを種類別に分類すると、断然多いのが「漢学」で二六種類（構成比一六七％）、ついで「通史」が二三種類（同八・三％）でつづく。（中略）多くが大阪・京都の書肆による出版であるが、なかには「大

学衍義補」のように篠山藩版による出版物も含まれている。

種類が多く漢学・通史関係が主であるという意味では梧陵の蔵書と共通性もあるが、文化水準の高い京都に近い地域の豪農であってもその蔵書の多くは唐本ではなく大阪・京都の出版物が主であったことがわかる。この点を踏まえ第一節では「濱口梧陵文庫」の主要な唐本コレクションについて紹介していく。

第一節「濱口梧陵文庫」の唐本コレクション

濱口梧陵の蔵書の大部分を占めるのは中国の輸入漢籍「唐本」であり、冊数で約三九五〇冊、巻数で二二六〇〇巻以上に及び明治初期までの個人蔵書としては大規模なものであるが、これらの書籍は必ずしも梧陵一人の手で蒐集された訳ではない。特に重要なのは梧陵と同郷の先輩橋本柑園である。柑園は「同地方に於ける漢學の泰斗にして、広村文学の開祖とまで称せられ」、「濱口梧陵文庫」との関係では「彼が数千巻の蔵書を梧陵に賣却したり。」と記される。⁽³⁾

また売却された書籍については『広川町誌』に「かつて長崎で購入したという明版二十一史は梧陵文庫に収まっている」という記載がある。⁽¹⁾

二十一史は『史記』から『元史』に至る中国の公式歴史書で二五五九卷（冊数五三八冊）にのぼる書籍群であり（写真（1））、二十一史の収納箱の蓋の裏側には「天保八丁酉（一八三七）年に長崎より持越」したと記される。

これらの書籍には各巻に一つ一つ「尚賢堂図書記」という梧陵のもの以外と考えられる蔵書印が押されており、橋本柑園の蔵書印と類推される。

橋本柑園の二十一史の購入は、民間知識人の蔵書形成の観点からも注目すべきものである。現存する同時期の蔵書の内大規模な唐本蔵書を有する下記文庫と比較しても柑園の蔵書は大きく見劣りはしない。

1,001冊 安井文庫（安井息軒蔵書部分）

753冊 蒼龍館文庫（金沢佐渡家旧蔵文庫）

出版地不明書59冊を除く

約400部 羽田八幡宮文庫 3,009巻

橋本柑園は天保の改革の影響で破産するが、その蔵書

は梧陵に売却される。梧陵所蔵の唐本は、橋本柑園の蔵書と比較しても冊数で七倍以上の規模まで拡大する。また、幕末明治初期を代表する漢学者安井息軒（一七九六～一八七六）の蔵書と比較しても約四倍の規模であり、刊本の輸入漢籍「唐本」は地方の読者にとって驚くほど高価であったとされる当時、容易に入手できなかった。

書誌学の專家弥吉光長氏によると「売買価格は、長崎会所が唐船から引取る元値と比べて数倍から数十倍はしたように思われる。そのうち長崎で上乘せるのは、元値と落札値との差（二割から五割）、諸掛け約十割、利鞘（落札商人の）と文化十三年取極めの五割増で、元値の二倍はかかるから、大阪着までの運賃と、大阪の呉服商または薬種商の手数料を加えると元値の四倍半にはなったであろう。その後唐本市の入札での競争によるつり上げ、また業者間の融通によって書価は六―八倍になり、時には一〇倍になる可能性があった。その上輸入の時期によって高低があり、精板や有名板になるとさらに高く、二、三十倍に高騰したものと思われる。」とされる。⁽²⁾

梧陵の蔵書は明治期以後入手したものが多くとも考え

られる。実際、静嘉堂文庫などの日本の大型文庫は、大名蔵書を除けば日清戦争以後清朝が不安定化し書籍・文化財が国外へ大量流出した時期に蒐集されたものが多い。

しかし、梧陵の生前、清朝は全盛期を過ぎたとは言え健在であり、また、多くの蔵書を有した大名家等は明治以後も華族として温存されたためまだ本格的な没落は始まっていない。それらの蔵書は市場に出回ることであっても限定的であつたと考えられる。加えて、「濱口梧陵文庫」内の唐本には、明治以後の刊本は見当たらないため蒐集時期は主に江戸期と考えるのが自然である。

また、梧陵文庫の唐本コレクションの規模は明治初期の購入を考慮に入れても、幕末明治初期の民間知識人の蔵書の規模としてははや規格外であり、より大規模な大名や藩校などの蔵書と比較すべきものと考えられる。

江戸から明治初期の代表的な大名や教育機関の唐本の蔵書冊数（ただし、梧陵の没年以降に発行された書籍及び写本は除く）は以下のとおりである。

約49,000冊 尊経閣文庫（加賀前田家蔵書）

約18,100冊 蓬左文庫（尾張徳川家蔵書）

5,749冊 泊園文庫（西日本最大規模の漢学塾）

出版地不明書326冊を除く

5,717冊 写字台文庫（西本願寺歴代宗主蔵書）

出版地不明書283冊を除く

5,510冊 伊達文庫（仙台伊達家の蔵書）

出版地不明書127冊を除く

5,158冊 紀州藩文庫（学習館等紀州藩校蔵書）

出版地不明書448冊を除く

約3,950冊 濱口梧陵文庫

2,543冊 玉里文庫（玉里島津家旧蔵書）

1,863冊 南葵文庫（紀州徳川家蔵書）

出版地不明書4,072冊を除く

1,678冊 鍋島家文庫（肥前鍋島家蔵書）

出版地不明書2,217冊を除く

1,527冊 佛教大学貴重書（唐本の仏典含む）

外様筆頭大名の加賀前田家と徳川一門最大の大名の尾張徳川家が巨大な蔵書を形成しているのを除けば、大名や藩校の蔵書は出版地不明書を含めても二千冊から六千冊の規模であり、「濱口梧陵文庫」はそれに匹敵する

規模と言える。大名等の蔵書は長期間を経て形成されたものが多いが、梧陵とほぼ同時代の蔵書としては島津久光の旧蔵書「玉里文庫」がある。島津久光（一八一七—一八八七）は学問好きな大名で自ら歴史書『通俗国史』八十六巻を記すほど歴史に造詣が深かった。蒐集した書籍は特に和漢の歴史資料が多く、史部（歴史書、地理書等）の唐本は一四〇五冊に及ぶ。

他方、梧陵の蔵書にはそれを上回る規模の史部に属する唐本が現存している。梧陵の蔵書の史部に属する書籍は三九五〇冊の漢籍の内、半数近い一八〇〇冊をしめる。

濱口梧陵は自身が創設した耐久社の社則に「学問の要は安民にあり。」と述べているように学問が実際の事業に役立ち民衆を救うことを重視した人物である。史部の書籍が多い理由も過去の前例に通じて現実の政治に活かそうとした結果と考えられる。それらの要素を踏まえ「濱口梧陵文庫」の内容を史部の漢籍を中心に検討していく。

第一項「濱口梧陵文庫」と目録学

目録学の定義としては、窪徳忠氏が『目録学』刊行の辞に「そもそも『目録学』というものは、中国において

特殊に発達したもので、中国における歴代の學術の源流を述べ、その著述の流別をおこなうことを本旨とするもの」と述べているのが比較的わかりやすい⁽¹⁶⁾。

中でも『四庫全書総目（提要）』二〇〇巻は、乾隆四十七年（一七八二）に成立し、『四庫全書』未収録の書物を含めた合計一〇二五四種、一七二八六〇巻の書籍の総合目録であり、「それは各部に総序、各類に小序、各書に提要があるなど、完璧な伝統的な目録編纂の体制を備えている。（中略）規模が巨大で体例が比較的そなわり、内容が豊富で一定の学術的な価値を有する、それまでには無かった目録学の名著⁽¹⁷⁾」と評価される。

乾隆六十年（一七九五）に出版されると日本にもすぐ伝来し、文化二年には昌平坂学問所から官版が出版される。初期の版本で現存しているものの多くは官版である。しかし、梧陵文庫の版本は乾隆六十年十月に最初に刊行された浙江本であると考えられる⁽¹⁸⁾。梧陵文庫本は梧陵生前の版本で浙江刻本のみの特徴である『欽定四庫全書総目提要』という扉頁が増されているからである（写真（2））。また、「濱口梧陵文庫」には清の阮元等が四庫全

書に収録されていない書物の提要を記した『四庫未收書提要』の写本も合せて所蔵する。

『四庫全書総目』と共に目錄学上特に重要な書籍に『欽定天禄琳琅書目』十巻がある。天禄琳琅とは乾隆九年（一七四四）に清朝が蒐集した善本を乾隆帝が宮廷の「昭仁殿」に集めた善本蔵書室の名称である。『欽定天禄琳琅書目』は「清廷内府の善本書目。初め、乾隆40年（1775）、内府に収蔵する宋より明に至る善本422部を経史子集に分け、各書ごとに著者の説明から、出版・蔵書者、蔵書印の説明に及んだ。」とされ、「現在の古籍善本の投資分野においては、『欽定天禄琳琅書目後編』記載書目が、善本鑑定における大きな依拠になっている。」（台湾故宮博物館HP解説）とされる。『天禄琳琅書目』は写本の形で伝わり、刊本は光緒十年（一八八四年）に長沙王氏が刊行した系統のみが知られる。「瀆口梧陵文庫」に残る刊本は敲雲書屋蔵と記され一般に知られていない刊本である（写真（3））。梧陵の死亡年は一八八五年であり王氏刊本以前に遡る可能性も高い。

『彙刻書目』十巻は清の顧修が編纂。「嘉慶4年

（1799）刊。261種の叢書・合刻書について、類を分けてその細目を並べ、各書ごとに撰者の姓名・巻数・刻本を記す。」（『中国史籍解題辞典』四頁）。『也是園書目』十巻は、清初の蔵書家錢曾の蔵書目録。

瀆口梧陵は書物の内容がわかる『四庫全書総目』並びに『四庫未收書提要』、版本の良否を判定する『欽定天禄琳琅書目』、叢書・類書等の中にある書物の検索ができる『彙刻書目』と用途に応じた書籍目録を体系的に蒐集したと言える。その中には大名クラスの蔵書でも入手が稀なものもあり、瀆口梧陵の書籍への探求心を深く感じさせる蔵書内容である。

第二項「瀆口梧陵文庫」の武英殿本

「瀆口梧陵文庫」には北京の紫禁城の印刷所で刊行された清王朝刊行物「武英殿本」が複数伝存する。台湾故宮博物院の「清代殿本圖書特別展」の解説には

清代王室は豊富な財力で武英殿修書処を設立し、専門に朝廷が編纂を命じた書籍を刊行し、これら武英殿修書処を中心に編纂された書籍を略して「殿本」と呼んだ。（中略）用いる材料の工夫、装飾の華やかさ

は、皇室（特有）の精巧さと豪華さで、殿本図書の最も突出した特色です。（『皇城聚珍・清代殿本圖書特展』

二〇〇七年序言

と述べられているように、最高品質のものであった。「瀋口梧陵文庫」にある武英殿版は『万寿盛典初集』『西清古鑑』『南巡盛典』『文献通考』の四点であり、特に『万寿盛典初集』『西清古鑑』『南巡盛典』の三点は武英殿本の中でも比較的確現存が少なく、かつ学術的、美術的価値が高いとされる書籍である。

（1）『万寿盛典初集』（写真（4））

『万寿盛典初集』一二〇巻は康熙五十二（一七一三）年三月十三日の康熙帝の六十歳にあたる日に開催された祝典の様子を伝えた書籍で、康熙五十六年（一七一七）に公刊された。康熙帝は在位五十五年で中国史上最長の在位期間をほこる皇帝となった。『万寿盛典』はその記念出版的意味合いもあって大変充実した内容である。

特に四十一巻と四十二巻を構成する「万寿盛典図」は全部で一四六枚、清代の著名な画家や名工の手で製作され、「清前期版画の代表作品であり、清初政治、経済、

典章、民俗、風情、建築を考察する上で、貴重な形象化資料を提供し、北京城市の歴史地理を研究するうえでとても高い文献価値がある」とされている。⁽²⁰⁾

『万寿盛典初集』の伝存は稀で、初版本の完本保有は国内で二例（内閣文庫、静嘉堂文庫）のみであり、梧陵の蔵書本は内閣文庫蔵本と同様のほり傷が見られ、同版と推定される。

（2）『西清古鑑』（写真（5））

西清古鑑は乾隆二十年（一七五五年）に武英殿で刊行された乾隆帝所蔵の青銅器図録であり、『西清古鑑』が四十巻、附録の『錢録』が合せて十六巻、四十二分冊で刊行された。一五二九件の古代銅器が収録され、銅器ごとに絵が描かれ、銘文・寸法が詳細に記述され、（中略）後世の青銅器研究に対する影響はとても大きいとされる。

（台湾故宮博物院HP『西清古鑑』解説）

日本国内で、梧陵文庫が形成された明治初期以前に遡って武英殿本の所蔵を推定できるのは内閣文庫の二点と前田育徳会の一点のみで、伝来自体かなり稀であったと考えられるが、梧陵文庫本は内閣文庫本と同じく四十二冊

本で初版本の外形を備えている。中国国内でも初版本の保有が確認できる公的機関は国家図書館、上海図書館、復旦大学図書館の三例のみの希少な書籍である。

(3) 『南巡盛典』

『南巡盛典』は乾隆三十六年（一七七一年）に刊行され、全部で一二〇巻。乾隆帝は生涯を通じて六度江南を視察し、『南巡盛典』は四度の南巡を描いたもの。特に巻九十四、一〇五までの名勝は河北盧溝橋から浙江紹興蘭亭までの行程を著名な画家上官周が模写した挿絵一六〇幅が挿入され、清代殿本版画中の上乘の作であり、この書は清代の江南の政治、経済、文化を研究する上で比較的高い史料価値を有する（台湾故宮博物館H P『南巡盛典』解説）。国内に伝存するものの内、梧陵文庫と同時代の明治初期まで来歴が遡れるのは内閣文庫（松平定信旧蔵一点含む）の四点と東京大学（南葵文庫）の一点で、所蔵者が確認できるのは御三家御三卿以上の家系である。濱口梧陵文庫が所蔵する『南巡盛典』は紅葉山文庫本等と同じく乾隆三十六年序刊の四十八冊本で、同版と考えられる。

これら三点の殿本すべての保有を確認できる収蔵機関は、日本国内では將軍家蔵書を引き継ぐ国立公文書館内閣文庫、清末屈指の蔵書家陸心源の蔵書を引き継ぐ静嘉堂文庫のみで、国外でも清王朝の蔵書を引き継ぐ台湾国立故宮博物院で確認できる程度で限られており、それはいずれも世界有数の大規模蔵書を引き継ぐ機関である。

第三項「濱口梧陵文庫」と歴史書

梧陵は学習館知事時代に制定した学則に「讀書は經書を先にして、禮樂政治の大本を體し、歴史を讀みて治亂の跡を弁じ、制度の沿革を察し、損益可知の政理に達すべし。」と記すように、史書により世の興廃や制度の沿革を学習することを重視した人物である。⁽¹⁾

梧陵の中国史への造詣の深さは、中国の歴史書の紀伝体・編年体・紀事本末体の三つの書体及び制度史を扱う政書がバランス良く、しかも通史的に収集されていることからわかる。各文体の書籍が網羅されているのは同時代の大名家蔵書などでも珍しい（別紙表①参照）。

紀伝体は司馬遷『史記』から始まる文体で、本紀、列伝、志、表などによって構成され、歴代の公式編纂史書であ

る正史はこの文体で書かれる。濱口梧陵蔵は『史記』から『元史』に至る二十一史（二五五九卷）を明崇禎年間刊本で揃え、さらに『明史藁』三一〇巻を加えて、中国古代から明代までを通観できる蔵書内容となっている。

編年体は出来事が発生した順に記述していくスタイルの歴史書。代表的なものとして宋代司馬光編纂の『資治通鑑』二九四卷（一〇八四年成立）がある。『資治通鑑』は周威烈王二十三年（前四〇三）から五代後周顯徳六年（九五九）に至る一三六二年間の通史。梧陵の蔵書には二つの版本がある。『資治通鑑』が扱っていない時代を補う史料としてそれ以前を扱った『資治通鑑外紀』十卷、宋元の時代を扱った『宋元通鑑』一五七巻もある。

紀事本末体は重要な事件ごとに、原因から結果までをまとめて記述する文体で、事件ごとの経過がわかりにくい紀伝体や編年体の弱点を補うために案出された。梧陵蔵書には資治通鑑以前の時代を扱う『通鑑紀事本末前編』十二卷、『資治通鑑』を事件ごとに編纂し直した『通鑑紀事本末』四十二卷、宋代を扱った『通鑑紀事本末宋編』十卷、元代を扱った『通鑑紀事本末元編』四卷、明代を扱っ

た『明史紀事本末』八十巻があり、古代から明代までを網羅している。紀事本末体は最も後世にできた文体であり、軽視される傾向があるが、事件ごとの関連性を理解するうえで最も有効な文体である。濱口梧陵の蔵書にはそれが通史的に揃っている。これに加え、清朝は梧陵の時代まだ健在のためその通史は登場していないが、魏源（一七九四～一八五七年）の編纂した『聖武記』十四巻が代替となる。『聖武記』は清朝の興起よりアヘン戦争までの二百年間の主要な出来事を主に兵事の点から扱った書物で「些細な事実の誤りは少なくないが、歴史の大勢をよく把握していて要領を得ているので、後世の清朝の概説書には本書に負うところが多い。」（『中国史籍解題辞典』一九四頁）書籍とされる。これを含めると梧陵の時代までの中国の歴史はほぼ通観できる。

政書はいわゆる制度史を中心に扱った書物であり、梧陵文庫の中では『杜氏通典』『文献通考』『続文献通考』『皇朝經世文編』が該当する。

『杜氏通典』二百巻は「唐・杜佑（735～812）撰。徳宗の貞元17年（801）に成る。黄帝・唐虞より唐・

天宝年間（742～756）に至るまでの中国歴代典章制度の書。」（『中国史籍解題辞典』二五〇頁）であり、古代から唐代までを扱った政書の元祖といつてよい書籍。それを継承して宋代までを扱ったのが馬端臨『文献通考』三四八卷である。『文献通考』は宋末・元初の馬端臨の作。延祐四年（一二一七年）成立。「古代から宋までの諸制度を記す。（中略）司馬光『資治通鑑』が、古代から五代末まで、治乱興亡には詳しいが、制度に関しては簡略であり、杜佑『通典』は、天宝年間（742～56）までで終わっているため、この書を著し、古代より南宋・嘉定末年（一二二4）に至る諸制度を詳述した。」（『中国史籍解題辞典』二九九頁）、また清末の代表的学者阮元は「資治通鑑を読み、已に歴代政事に通曉し、文献通考を読み、已に歴代政典に通曉す。号して二通と称す。」といい、中国史を理解する上で必須の文献に位置付ける。「濱口梧陵文庫」にある『文献通考』は乾隆戊辰年（一七四八）に復刻された『御製重刻文献通考』であり、最近中華書局から刊行された最初の校点本でも底本として使用されている質の高い刊本である。

『文献通考』の続編として制作された書が明の王圻編纂の『統文献通考』二五四卷である。『統文献通考』は万曆十四年（一五八六）成立。南宋の嘉定年間から明の万曆初年に至る間の記事を叙述する（『中国史籍解題辞典』二二二頁）。『皇朝経世文編』一二〇卷は清の賀長齡（二七八五～一八四八）の編纂。一八二七年に刊行。賀長齡は「幕友の魏源に編集を委ねて、清代の官文書や奏議、論著、書信、筆記等から材料を集め、清初から道光年間までの行政実務や現実的な統治政策に関わる文章等を集大成した」（『中国史籍解題辞典』九五頁）。

以上四分野の書籍群を見ると各分野における通史的網羅性は際立っていると考える。濱口梧陵は恐らく各時代に偏りすぎないよう蒐集したのであろう。

そして、それらの蔵書が読み込まれていたことは、各書に付された句読点や編年体の史書『資治通鑑』に梧陵の本名成則の署名を含む書き込みが有ることからわかる。

第四項「濱口梧陵文庫」の地理書

濱口梧陵は地理学を極めて重視し、その道においては専門家といつていいほどの学識を有していた。梧陵と交

流があった松山棟庵（後の慶応義塾医学所校長）も「梧陵の地理學研究に對する熱心は真に驚く可きものあり。特に精通したるは支那の地理にして、近代人の知らざる歴代の地名さへ暗んじ居りたり。」と証言する。

一方、実際にどのような書物をどの程度の水準で研究したかは不明であったが、「濱口梧陵文庫」の調査により一端が判明した。中国古代の地理書『山海經』十八卷や中世の地理書『水經注』四十卷には句読点や多数の書込み（『山海經』百十八字、『水經注』約一六〇〇字）が見られ、また巻尾において、『山海經』には弘化丁未年（一八四七）の閲読を記す書込みや『水經注』には弘化丁未年（一八四七）と安政乙卯年（一八五五）の二度にわたって閲読したことを記す書込みがあり、梧陵は青年期において中国地理に関心を持っていたことがわかる（写真（6））。

後年、梧陵の興味は中国領域からアジア全体に拡大していったと考えられる。それを示す資料が『地球説略』と『海国図志』である。

『地球説略』については『濱口梧陵伝』四二二頁に掲載

された福田兵四郎が梧陵に宛てた以下の手紙には梧陵に贈呈したことが記されている。

蔵板地球略説一本、六合叢誌三集出來呈上仕候。地球の方調所改済兼候間、他見御用捨可被下候。追て全部改済相成候上又々呈上可申候。

福田兵四郎は万屋兵四郎とも称され、海外からの輸入書籍の検閱等を行う幕府の機関「蕃書調所」の御用商人であり、日本初の海外新聞「官板バタビヤ新聞」の発行や勝海舟とともに開成所版『万国公法』を刊行したことも知られる。梧陵とは親しい友人であった。

『地球説略』はアメリカの宣教師ウエイ（禧理哲）が一八五六年に中国寧波で刊行した世界地理書で万延元年（一八六〇）には日本版が万屋兵四郎によって刊行された。日本版はキリスト教に関わる部分が削除されており、「濱口梧陵文庫」本はその省略がないことから福田兵四郎の手紙のとおり蕃書改め前の原書と考えられる。

この書籍の東南アジア部分には全部で一九一文字に及ぶ書き込みがなされ、梧陵の署名（成則）を含んだ『海国図志』の書き込みと字体も近似する（写真（7）、（20））。

『海国図志』はアヘン戦争直後の一八四二年に清の人魏源によって刊行された本で、世界地理を説きながら西洋の長技を学ぶべきことを主張した警世の書として幕末の日本に最も影響を与えた書である。多数の日本版が出版される一方、原書は入手困難な書であったが、梧陵文庫には日本初渡来時と同じ一八四七年版の六十巻本が伝存している。梧陵文庫内の『海国図志』には中央アジアや東南アジアの部分に全部で二一七八文字に及ぶ多数の書き込みが見られ、梧陵が同地域に関心を持っていたことがわかる(写真(8))。

これに加えて、「濱口梧陵文庫」には世界地理書としての箕作省吾の『坤輿図識』や徐繼畲の『瀛環志略』、中国初の歴史地名辞典とも称される清の李兆洛の『歷代地理志韻編今釈』、更に既述の中国最古の地理書『山海経』、北魏の酈道元『水経注』とともに北宋の楽史の『太平寰宇記』、明の陸応陽の『広輿記』など中国の古代・中世・近世の主要な地理書がある。

また、梧陵の日記(庚午之記)に福沢諭吉からの送付が記される『世界国尽』等様々な地理書があり、それら

からも地理知識を得ていたと考えられる(『濱口梧陵伝』二二七頁)。

更に、地理知識を得た書物は地理書だけではない。例えば、『万寿盛典』や『南巡盛典』に付されている図はそれぞれ北京近郊や江南地域の地理を研究する上でも屈指の形象化資料たり得る。もう一つ注目されるのは歴史書である。例えば、司馬光『資治通鑑』に注釈を行った胡三省は地理学者としても評価が高い。既述の梧陵蔵書の『資治通鑑』巻二十の漢武帝の西域経営を記した部分には、胡三省の地理考証に附して梧陵も詳しく地理的考証を書き記している(写真(9))。そうしたことから梧陵が地理学の研究にとっても熱心であったことは裏付けることができる。

第五項 類書・叢書類

類書・叢書は集部に属する。類書とは複数の書籍中に見える事項を項目別に分類したもので一種の百科事典。叢書は多数の書籍を集成した刊行物であり、梧陵文庫では『太平御覧』『冊府元龜』『文苑英華』『説郛』『津逮秘書』『淵鑑類函』『讀書齋叢書』等が該当する。

『太平御覽』千卷、『冊府元龜』千卷、『文苑英華』千卷は宋代の四大書と呼ばれる類書の三つである。『太平御覽』は各種事項を総集したものであり、『冊府元龜』は「君臣が政治の鑑戒とし将来の典法となすべき古籍大書を意味」（『中国史籍解題辞典』一二二頁）し、『文苑英華』は南朝梁以後、晩唐・五代に至る間の諸家の詩賦・文章を輯めた総集である。『説郛』一二〇巻は元末明初の人陶宗儀による編纂。「先秦より元代に至る経・史・伝記・随筆等の数千余種から、節録したり、類書中から分鈔」（『中国史籍解題辞典』二〇〇頁）したもの。『津逮秘書』七五二巻は明の毛晋（一五九九～一六五九）編。「その内容は、経書・仏説・諸子より随筆・雜記に及び、時代的にも漢・魏より元・明に亘り、中国史の研究上重要な文献を収めている。」（『中国史籍解題辞典』一七八頁）

『淵鑑類函』四五〇巻は清の張英を編者として一七一〇年に成立した官選書。「唐・宋・元・明の詩文・事蹟を博く採収し、綱目をたてて分類したのが本書であるという。必ずしも誤謬がないわけではないが、故事を検索するには非常に便利な書」（『中国史籍解題辞典』一四頁）とさ

れる。これらの書は各々その時代を代表する類書または叢書であり、これに一七九九年編纂の『讀書齋叢書』を加えて、ほぼ梧陵生誕以前の時代を網羅する。

以上「濱口梧陵文庫」の唐本書籍群の特徴について考察すると、各分野における通史的網羅性という点は際立っていると考ええる。これらの書籍は中国史を研究する上で基本史料も多いが、清代の書籍を中心に貴重な書籍もあり、藩校や大名蔵書ならまだしも個人蔵書家がそれを網羅的に収集している点は注目に値する。

第二節「濱口梧陵文庫」の和本コレクション

第一項 海保青陵関係書籍

濱口梧陵は徂徠学派であったとされ、蔵書内にも多くの徂徠学派関係の書籍が現存する。主なものに荻生徂徠関係の著作は『鈴録』、『徂徠先生問答書』、『四家雋』、『徂徠集』、『弁名』、『孫子国字解』等。太宰春台関係は『産語』、『詩書古伝』、『論語古訓外伝』、『六経略説』、『春台先生紫芝園前稿』、『春台先生紫芝園後稿』、『標箋孔子家語』等、海保青陵関係は『善中談』、『万家談』、『變理談』、『天王談』、

『前識談』、『富貴談』等がある（別表②参照）。

中でもその存在が注目されるのは海保青陵（一七五五～一八一七）の著作である。その理由は海保青陵が知られるようになったのは梧陵の時代より後世のことであるからである。吉田敏純氏は「海保青陵は、伝統的な儒学の流れから生まれた経済論の最高峰といえる人物である。しかし、青陵の知名度は低かった。注目されるようになったのは「明治の終わり頃である」とする。⁽²³⁾具体的に海保青陵が全国的に知られるようになったきっかけに、経済思想史の先駆者滝本誠一（一八五七～一九三二）が一九一五・一六年出版の『日本経済叢書』で「徳川時代の『大経済学者』の一人として紹介したことを挙げることができる。その後、二十五種類あまりの著書が発見されるがまとまった形で伝存は稀である。

『濱口梧陵文庫』には『善中談』、『万家談』、『變理談』、『天王談』、『前識談』、『富貴談』の六書が写本の形で伝わり、滝本誠一による発見以前の蔵書としては最大級のコレクションを形成している（別紙表参照）。中でも『富貴談』は一九二一年に上田貞次郎によって「濱口梧陵文庫」

内から初めて紹介され、世に知られるようになった（写真（10））。その際、上田貞次郎は滝本誠一に相談した上、滝本も加筆し出版したと序言に述べる。⁽²⁴⁾

なお、滝本誠一が一八八一年に最初に就職したのは和歌山市の自修学校で、梧陵が同時期に自修学校に援助を行っていたことは、当時自修学舎教員であった鎌田栄吉（後の慶応義塾塾長）が証言する。

明治十一年頃私も教へに行つたのです。（中略）其の頃自修舎は渡邊主水と云ふ人の邸にあつて、長屋喜彌太、岸新作などが専ら學校の世話をして居ましたが、維持費がなくて大分困つたので、長屋が一つ寄附金を募集しようぢやないかと云ひ出したのです。其の時長屋は私を連れて、休賀町に居た梧陵さんを訪ねたのですが、私は此の時初めて梧陵さんに會つたのです。其の後梧陵さんはいろいろ學校の事を世話して呉れる様になり、自修舎へも来られ、私の方からお訪ねして、お目にかゝる機会も時々ありました。

滝本誠一と梧陵は直接面識があつた可能性も十分ある。⁽²⁵⁾

第二項 「古碧吟社」関係書籍

「古碧吟社」は文政九年（一八二六）ごろ和歌山より野呂介石の甥、野呂松蘆を師に迎え結成され、梧陵の師とされる橋本柑園もその同人であった。⁽²⁶⁾

野呂松蘆は昌平黌で学び、菊池海莊に招かれ、同地に居住した人物であり、その地には「江戸の大窪詩仏・京都の中島棕陰・伊勢の斎藤拙堂・山陰の野田笛浦・山陽の仁科白谷・九州の広瀬旭莊ら」著名な文人も来訪し、紀南文学の中心地となる（『湯浅町誌』八九〇頁）。

「古碧吟社」は文政十二年（一八二九）に『古碧吟社小稿』という同人の詩集を刊行した（写真（11））。『古碧吟社小稿』は「古碧吟社」が設立して三年後には同地域では同人冊子が作成できるまで漢詩が普及していたことを示す重要資料であるが、同書の伝存は稀で『濱口梧陵文庫』以外では関西大学図書館の所蔵が確認できる程度である。

「古碧吟社」の同人中、梧陵と関係が深い人物に菊池海莊と先にふれた橋本柑園がいる。

菊池海莊（一七九九～一八八一、本名は垣内保定）は広村の近隣の栖原の出身で「江戸砂糖商内仲間において常

に筆頭の地位を占めてきた」河内屋孫左衛門店を経営する豪商である。また、「全国に名の知られた卓越した漢詩人であったのであり、その交流関係は頼山陽・松崎慊堂・羽倉簡堂・広瀬旭莊等、一級の知識人に広くひろがっていた。」とされる。⁽²⁷⁾

菊池海莊の出現により同地域における漢学の水準が全国レベルの漢詩人を生むまで進歩したことがわかる。「濱口梧陵文庫」の内、菊池海莊関係の書籍は二つあり、一つは海莊の漢詩文集『海莊集』（一八四九年刊）である。もう一つは中国の金末元初の人、元好問の詩文に海莊がレ点、送り仮名等を付して編集した『遺山先生詩鈔』（一八三六年刊）で、いずれも当時の有田地方の漢学の水準を伺い知るうえで重要な書籍である。

第三項 海防・兵制関係書籍

文政三年（一八二〇）生まれの濱口梧陵が社会活動を開始するのは、二十代前半頃であり、このころ起こった重大な事件としては、天保十年（一八三九）にモリソン号事件での徳川政権の政策に対する批判を弾圧した蛮社の獄が生じたこと。一八四〇年に勃発したアヘン戦争に

おいて清朝がイギリスに大敗したこと等がある。

大國清朝の異國との戦争、敗北は大きなニュースであったが、幕末情報論の專家岩下哲典氏が指摘するように「蛮社の獄」を事前に知った三英は自殺し、そのほか渡辺崋山や高野長英など多くの蘭学者が弾圧され、弾圧されなくても、情報・知識を供給できる人々が、必然的にいわゆる「自粛」を余儀なくさせられ、海外政治情報の結果は庶民のもとに届かなくなってしまった²⁸。

海外情報は知りたくても入手困難な状況であり、特にアヘン戦争情報は嘉永二年（一八四九）に出版された嶺田楓江の『海外新話』が発禁処分を受ける等自由に手に入らなかった。「濱口梧陵文庫」中、アヘン戦争情報をいち早く伝えたものとしては佐藤信淵著の『水陸戦法録』八巻が現存する。『水陸戦法録』は清国がイギリスに敗れたことを知り驚愕した安濃津侯が平田国学の流れをくむ経世家の佐藤信淵に命じて、清国と同じ轍を踏まないよう両軍の戦法を詳細に記させた実録であり、嘉永元年（一八四八）五月に完成し、写本の形で普及した。濱口梧陵はアヘン戦争情報をこの書から得たと考えられる。

黒船来航以前の梧陵の海防論は尊王攘夷色が強い。典型的なのは梧陵が嘉永四年（一八五一）に海外の脅威から広村を守るため組織した崇義団の趣意書である。趣意書中には「近年異國船渡來いたし候其本心は、我日本國をねらひとつて、我物にせんとのたくみなり。もし我日本土地少しにても夷人等にとられては日本の大恥」や「我 神國を御開き被遊、國の御柱と崇奉類 御伊勢様の御子孫は、現にまします 天子様なり。」など国学色の強い表現が並ぶ（『濱口梧陵伝』五七～五八頁）。しかし、梧陵はペリー来航後は開國論に転ずる。そのような思想的転換はなぜ生じたのか。まず蔵書の観点から検討する。

嘉永三年菊池海莊は海防建議を藩主に上奏し、同年には有田郡・日高郡文武総裁に任命されており、梧陵の崇義団の組織もそれに呼応したものと考えられるが、海莊は梧陵の海外情報を増加させる上で大きな役割を果たした。『濱口梧陵伝』には『海防彙議』という書の送付を伝える海莊からの手紙が収録されている²⁹。

一、海防彙議十巻友人松園編輯に御座候。昨年中より頼み置候間此度出來申候。御覽可被下候。補遺も

五卷計は出来可申奉存候。來月前後に此本國城方へ爲持遣し可申奉存候。

『海防彙議』は菊池海莊の友人の塩田順庵編纂の海防関係の著作を集めた叢書で、一八五〇年頃に菊池海莊の勧めで作成され、『海防彙議補』には海莊の序文もある。いくつも続編が編纂され、梧陵文庫にも五十冊以上現存する(写真(12))。梧陵は海防関係の基礎知識をそれから得ていたと考えられる。阿部龍夫氏は『海防彙議』の内容を「海防彙議」全巻を通覧すると、種々矛盾撞着した議論を並出して、観る者の取捨に一任して居るやうなところがあり、順庵自身の主張に従つて撰擇したやうな点は認められない。(中略)要するに、『海防彙議』は一定の主義方針の下に体系を整備したものでなくて、「詮次するに暇あらず」して獲るに従つて収録したもので、云はば素材のまま並べたものである。」とする⁽³⁰⁾。

海莊は梧陵を海防の同志に育成するため『海防彙議』を贈呈したと考えられるが、『海防彙議』が上記のように雑多な議論を含むものであったことは、かえってペリー来航以後、梧陵が開国論に転ずる下地を作ったと考えら

れる。もっとも開国論へ転じたとはいえ、梧陵は安政元年(一八五五)にロシア船ディアナ号が大阪湾に侵入した直後の安政二年には浦組を組織し、村民を教練するなど海防にも注意を払い続けており、必ずしも両立し得ないものではない。

他方、梧陵の初期の蒐集と考えられる兵書に『ウェルンストヒュールエルゲン』十二巻と『練卒訓語』八巻がある。『ウェルンストヒュールエルゲン』は一八二九年に和蘭海陸司炮の雅骨夫微尔列木(ヤアコワフウィルレム)が記した砲術に関する指南書で西村某が邦訳したとされる。この書は同名の書が見当たらず、邦訳書としては孤本の可能性がある(写真(13))。他方、『練卒訓語』は和蘭総督監卒の籍珀子(チベツ)著の軍事教練書である。

濱口梧陵はペリー来航前後とともに明治維新前後にも膨大な量の翻訳兵書を蒐集したと考えられる。ペリー来航前後のものを含めると三九種、一六七冊に及ぶ。兵書は時代とともに更新される傾向が強く、まとまって幕末明治初期の兵書が現存するのは稀である。

比較的大きな幕末明治初期の翻訳兵書のコレクション

に幕府系機関の蔵書の一部を引き継いだ静岡県立図書館
葵文庫一四六冊や仙台伊達家の蔵書を引き継いだ宮城県
立図書館伊達文庫一五八冊があるが、それをも上回る規
模である。これほど大規模な蔵書が蒐集された背景には
当時和歌山では兵制改革は最大の問題として認識されて
いたことがある。

「濱口梧陵文庫」には改革と同時期の兵書が大量に残さ
れ、全国的にも現存が稀な書籍も多数含まれる（別紙表
③参照）。蔵書には「和歌山藩秘書寮蔵書之記」や「学習
館記」と押印されたものや当時薩摩藩が発行した公式の
軍事教練テキストを含む（写真（14））。これらは兵制改
革期の軍事教練の内容を知るうえで重要な資料となり得
る。

このように多くの蔵書を入手し得、また求めた理由は
どこにあるのか、第二章では、「濱口梧陵文庫」が形成さ
れていく過程を考察していく。

第二章「濱口梧陵文庫」形成過程 に関する考察

第一節「濱口梧陵文庫」と地域社会

濱口梧陵がこれほどの規模の蔵書を保有できた理由に、
まず、同地域における資本形成が挙げられる。広村は近
世前期に近隣の湯浅や栖原とともに漁民達が関東地域に
出漁して干鰯等の売買により巨万の富を築き上げた地域
であり、現在でも日本有数の漁港である銚子港もその基
礎は広村出身の崎山治郎右衛門によって築かれた。

当時広村は湯浅と共に千戸と称され、紀中で最も富裕
な町に成長した。慶長十八年に作成された『紀州御検地
帳写』にも広町は石高千三百九拾三石余と、千六百七
拾九石余の湯浅町に次ぐ規模であった。⁽³⁾しかし、十七世
紀後半以降鰯の不漁、関東の地元業者の成長に伴う競争
の激化、そして一七〇三年に関東を襲った元禄地震と
一七〇七年に西日本を襲った宝永地震の津波により、関
東と紀州の漁港は壊滅的な被害を受けたこと等がもとで、
徐々に漁業からの業種転換が図られていく。

具体的には『ヤマサ醤油店史』によると初代ヤマサ当主教西が銚子荒野において醤油業を始めたのは元禄十六年（一七〇四）頃とされ、その他にも栖原出身の栖原角兵衛は東北や北海道に進出し、材木や海産物輸送で財をなし、同じく栖原出身の菊池氏も奄美の砂糖等の売買により江戸屈指の砂糖商に成長する。

また、文化領域において成功した有田郡商人としてはまず須原屋茂兵衛が挙げられる。須原屋は『武鑑』（大名や公儀役人等の人名録）等の販売で財を成した書籍商で、垣内貞氏によると「享保十二年（一七二七）から文化十一年までの須原屋一門の出版・売広め書の合計点数は二千二百三十三点以上（本家茂兵衛のみでは千百二十点以上）で、江戸書物屋全体で扱った同時期の刊行物の約三割に達する。」⁽³²⁾という。同地域は全国的にもまれな大規模な資本形成が見られた地域といえる。

当時ヤマサ醤油もヒゲタ、山十、ジガミサ等と共に銚子の有力な醤油業者の一つであった。その資本形成無しに蔵書を形成するのはそもそも困難である。

こうした地域的優位性がある一方、当該地域にはその

地勢ゆえの負の側面も厳然と存在した。梧陵が地理学を重視した理由も故郷広村の地勢的要因によるところが大きいと考える。梧陵自身が記した「海面王大土堤新築原由」（『濱口梧陵伝』一二二頁）には以下の記述がある。

爰に古老の傳話を稽ふるに、地勢の然らしむる歟、往昔より海嘯の災ある毎に其の衝に當り、慘害を被むる隣村に比して殊に劇甚なり。往昔は姑く措き、近古天正年間該災の爲め現戸（千七百餘戸ありしと云ふ）の四部を流滅すと口碑に存するも、尚九百餘戸を留めて寶永四年十月の災に罹り、現戸過半流亡し、淹死三百人あり。（中略）以來漸次に戸數減却し、嘉永安政の年度は僅僅三百餘戸未滿に至る。

広村はその地勢ゆえに津波の大きな被害に遭い、天正年間千七百戸あった戸数は五分の一の三百戸まで衰退した。その衰退の抑止は梧陵の大きな課題であった。『濱口梧陵伝』所収の安政三年（一八五七）の「代官の具状書」は梧陵の村民救済事業に言及する。

右廣村追々衰微に付、儀兵衛豫て工夫も致し置候哉、拾箇年程已前より同村難澁之漁師共へ漁船網仕入遣

し、猶又近浦にて難澁の漁師共をも呼寄住居爲致、漁事有之の節は相應之口錢納めさせ候得共、當時は右口錢も納不申、船網共無料にて漁事爲相働、餘分有之候節は元廻しの都合致し候に付、追々潤澤に相成。(『濱口梧陵伝』 二二六、七頁)

また、課題解決に中国地理書は参考にされた可能性がある⁽³⁾。古来、中国において決壊を繰り返す黄河の治水は歴代王朝の大きな課題であり、最初の王朝「夏」を開いた禹王は黄河の治水の功績で王位についたとされる。蔵書内の書籍では徂徠学派の太宰春台が、その著書『産語』の末編十二章良卜でその功績を高く評価している。

昔者、禹平水土濟民。立功於天下、而天下歸心焉。身爲天子、子孫相承。數百年矣。契爲司徒、布五教於天下。開國於商、積德數百年。至湯代夏有天下。子孫保之。亦數百年矣。后稷教民稼穡、樹藝五穀。民始粒食。開國於邰、積德千有餘歲。至文武代殷有天下、子孫保之。亦數百年矣。此三聖者。其治生也。可謂大矣。

昔は禹水土を平らげ民を濟う。功を天下に立てて天

下心を帰す。身は天子と爲り、子孫相承くこと數百年。契司徒と爲り、五教を天下に布く。国を商に開き、徳を積むこと數百年。湯に至り夏に代り天下を有し、子孫之を保つ。亦た數百年なり。后稷民に稼穡を教え、五穀を樹藝す。民始めて粒食す。国を邰に開き、徳を積むこと千有餘歲。文武に至り殷に代り天下を有し、子孫之を保つ。亦た數百年なり。此れ三聖は、其れ生を治るや、大なると謂うべし。

禹王の治水は儒教原理の創出や農業の創生と並ぶ最高の事業とされる。第一章第一節第四項で紹介した梧陵が弘化丁未年(一八四七)に閲読した『山海経』は禹王の時代を含む中国の神話の時代の地理書である。

また、弘化丁未年(一八四七)と安政乙卯年(一八五五)の二度閲読した『水経注』は中国各地の水路を中心に流域の都市・名勝・旧跡などを記した地理書である。最初の閲読時期一八四七年は梧陵が漁民救済を始めた時期にあたり、二度目の閲読時期一八五五年は安政南海地震の直後で梧陵が高さ四・五m、幅二〇m、長さ六七〇mの防波堤(広村堤防)を自費で建設し始めた時期と一致する。

なお、梧陵が堤防を建設した理由は、高い税が課されていた耕作地に堤防を建設し、税が免除されるよう図ったとも言われているが、特に大きな理由は「住民百世の安堵を図る」ためであり、それは先に紹介した『産語』の内容にも通じる。昭和初期に広川町を訪れた地震学者の今村明恒は「天下に比類なき理想に近い海嘯防禦設備」と称賛する。⁽³⁴⁾ 昭和二十一年（一九四六）に再び広村は南海地震による5mの津波に襲われるが、堤防に守られた町の中心部は被害を免れた。

また、別の理由に広村の人口流失を防ぐことがあった。既述のように度重なる津波の被害により広村の人口はピーク時の五分の一まで減少していた。安政地震の際も被災民は、津波のため耕す田畑も漁をする網も無く、飢餓に瀕するのを覚悟で留まるか、移住する以外に道がないような状況であった。しかし梧陵等が堤防を建設するため被災民を雇用し賃金を支給したことにより村民は生活が成り立ち、村は離散の危機から救われた。

他方、中国で治水が重視された理由は、災害がもたらす社会不安の防止という側面がある。黄河の大洪水等の

災害により、住居を失った者は流民となり他所を転々する間に暴徒化し、国家を揺るがす大反乱の温床になる事はしばしばある。例えば、元王朝が滅びる原因となった紅巾の乱もとは黄河の大氾濫に端を発している。

中国において黄河の治水は禹王の伝説のみならず現実の王朝の存続に関わる重要な問題であった。また、反乱が生じた際、真っ先に被害を受けるのは自前の軍事力を持たず、また、秩序崩壊により地域社会の保護も受けられない裕福な豪農商層である場合が多い。中国における治水重視の姿勢は濱口梧陵の思想にも影響を与えたと考えられる。例えば、『水経注』は禹王が開いた水路にも触れ、そこには水利という書込みがある（写真（15））。

また梧陵の一連の事業の開始に関連する興味深い書き込みが『水経注』巻三十八にある。（写真（16））

丁未夏五讀通 是年三月廿四日夜信州地大震山崩川壅廬舍悉壞死者無算 二十九日越後地大震

この丁未年（一八四七）三月二十四日の地震とは信州善光寺平を震源とした善光寺地震であり、M7.4に達する大地震で、五日後には誘発地震も発生して死者八千人以上の

多大な被害をもたらした。

濱口梧陵と関連して重要なのは、「山崩（れ）、川壅（が
る）」ことで生じた大洪水である。それは現在の長野市
にある標高約七六〇mの岩倉山の南西斜面が大規模に崩
れ落ち、春の雪解けで水量を増す犀川をせき止め、深さ
七〇m、長さ二三kmに及ぶせき止め湖ができ、十九日間
湛水した後、決壊したことで生じた。この決壊に伴う大
洪水は、犀川下流の善光寺平に壊滅的な被害を与えた。

洪水の高さは最大二〇mに達し、ほとんど津波といっ
ていい規模である。松代藩はその災害を予期し、犀口に
堤防を建設する。内閣府の報告書では以下のように記す。

善光寺地震の後、3月27日には、家老の恩田頼母が
犀口（小松原村）の普請のために出立した。山寺常山（源
大夫）、岩下革、磯田音門らは、農民たちを集めて普請
への協力を求める。この普請には1日1、000人が集
まったとされ、その手当てとして、1人につき米2合
5勺ずつ支給している。工事は、犀口付近の地崩れで
川幅の狭くなった場所を広げることと、堤防を築くこ
とであった。

一方、犀川のせき止め箇所について手を入れるとい
うことまでは進まなかった。松代藩としては、このせ
き止め箇所が決壊しても、犀口が守られさえすれば、
この大水は防げるだろうと判断したのであろう。ただ
し、松代藩士で兵学者であった佐久間象山は、この天
然ダムについては、火薬を仕掛けて爆破させることに
よって天然ダム湖の解消することを提言していたよ
うである。天然ダムを破壊しない限り、川中島平を救
えないと判断したに違いあるまい。⁽³⁵⁾

結果的に普請でつくられた堤防は決壊し、川中島平は
水没することになる。

弘化丁未年（一八四七）付の書込みは『山海経』は二か所、
『水経注』は六か所有るが何れも五月に集中する。これら
の書籍は善光寺地震の後、短期間の内に通読されたと推
定される。この地震の発生は梧陵に次の南海地震等の海
から来る脅威への警戒心を喚起したと考えられる。

また、それに関連して同年十月には広村百姓惣代七名
により広村の衰微が激しいことを理由に年貢の減免を求
める嘆願書『乍恐奉願上口上』が藩に提出されるなど、

村の復興に向けた動きも活発化している。⁽³⁶⁾

濱口梧陵は嘉永三年（一八五〇）に菊池海莊を介して佐久間象山に入門する。『濱口梧陵伝』には面会の際の海莊から梧陵への手紙が収録されている。⁽³⁷⁾

拝見仕候。御清安被爲入奉敬賀候。然ば佐久間被爲入候よし八ツ時分より御供可仕候。今日御築立に相成可申奉存候。蒙中序ながら匆々頓首。

十五日

定

梧陵様復

象山は西洋兵法学者として著名なのは勿論であるが、地震災害についても詳しい知識人であった。海外情報と地震災害情報を同時に必要とする梧陵にとっては、情報源として彼ほど適した人物は少ないであろう。

南海地震に先立つ嘉永五年（一八五二）には、梧陵とは橋本柑園を共通の師とする古田豊林（咏処）が『雨草茶話』を記し、宝永四年（一七〇七）の大地震における津波被害を叙述している。⁽³⁸⁾ また嘉永四年の崇義団設立の趣意書が強烈な攘夷思想を帯びる理由も広村の地理的要因から来る津波を含む海からの脅威への注意を喚起し、

村民の組織化を促すため最大限誇張したと考えるなら理解できる。

他方、『水経注』の書込みには万里の長城関係も多数あり、『水経注』卷三には以下の記述がある（写真（17））。

始皇長城実萬世之長策、然在當時則導怨亡國也 陰山是為華夷之限。

始皇の長城は実に万世の長策、然れども当時に在りては則ち怨みを導き国を亡ぼすなり、陰山は是れ華夷の限りと為る。

梧陵は秦の始皇帝の万里の長城を亡国の原因としながらも、中国と異民族とを分かち万世の長策として評価する。実際、広村堤防は海からの脅威から広村を守る長城と言える規模の建造物であり、発想に類似性が見られる。

梧陵の活動は広村の地勢から来る海からの脅威とそれより生ずる社会不安からいかに自身の家や事業並びにそれを包括する地域社会を保護していくかという地域的課題に対して出した答えであり、それにより梧陵は経世家として存在感を示すようになる。

広村堤防の建設など南海地震被災民を救済した功績に

より、梧陵は安政三年十二月に地士の最上位にあたる独礼格を仰せつけられる。このことは紀州徳川家の正史『南紀徳川史』第三冊昭徳公紀一二〇頁にも掲載されている。百姓の事績が『南紀徳川史』の本紀に載ることは少ないが、それほど梧陵の功績は紀州徳川家から見ても特出すべきものであったと考えられる。

このことは梧陵が明治初期の和歌山藩政改革の首脳の一人に拔擢され、和歌山県会が創出された際、初代県会議長に選出されていく重要な礎になっていく。

梧陵が地域支援活動を開始した時期、梧陵の人脈形成や情報蒐集も本格化する。以後その点について記述する。

第二節 濱口梧陵の人脈形成

梧陵が大規模な蔵書を形成できた要因に人脈形成が挙げられる。初期、梧陵の蔵書形成に寄与したのは橋本柑園や菊池海莊等の地元の知識人であるが広村近隣の栖原は江戸の出版物の三割を発行した江戸最大の書店須原屋の出身地で当時の当主は梧陵と親戚であった。³⁹⁾

さらに『万国公法』の発行者で、国外の書籍の検閲等

を行っていた蕃書調所の御用商人福田兵四郎は梧陵の親友であり、梧陵が関寛斎の世話などを依頼したことで知られる秋田屋太右衛門は大阪屈指の書店秋田屋の暖簾分け店当主であった。⁴⁰⁾ 梧陵は書籍流通に影響力を持つ彼らを入脈に加えた。また、梧陵は福沢諭吉等の全国レベルの文化人とも書籍のやり取りがあったことが彼の日記などからわかる。⁴¹⁾ これらの人脈が重なり合い、梧陵は民間では国内有数の書籍ネットワークを有する人物に成長したと考えられる。

人脈形成に関わって『濱口梧陵伝』などの記述で知り得る最初期の梧陵の社会活動に蘭方医三宅良斎の保護・支援がある。三宅良斎は肥前島原の出身で代々漢方医を営み長崎で蘭医学を学び江戸に出て医業を生業とした。当時「蛭社の獄」の余波で天保十三年（一八四二）三月、蘭方を用いることを禁止する布達が出たため江戸から梧陵のいる銚子に逃れてきた。梧陵は彼を保護支援し、生涯の友人とする。三宅の子の三宅秀（後の医科大学長、日本初の医学博士）は支援の理由を以下のように述べる。

濱口さんが亡父と交際する様になつたのは、種々の

理由があるだらうと思ふが、段々近寄つて來られる様になつたのは、別に由來がある。それは外でもない、亡父は西洋流の醫者であつたから、比較的西洋の事情にも通じてゐた。そして仕へてゐたのは佐倉の堀田侯で、此の殿様は西洋文明を輸入する上に少からざる功勞のあつた人であるが、外交の事にも明るいと思ふので、天保年間頻に異國船が渡來して、外交の關係が多端になつた時、老中に上げられた。父は慫う云ふ殿様の家臣であつたから、自然對外關係にも通じ、海外の事情を知るにはいろいろの便宜が多かつた。そこで濱口さんなども、三宅の處へ行けば新しい事が分ると云ふので、近寄つて來られたのだらうと思ふ。⁽⁴²⁾

三宅が佐倉侯に仕えるようになったのは弘化元年（一八四五）頃で、梧陵と出会つた後であり、親密な交際が始まるのは一八四〇年代中盤以降と考えられ、善光寺地震以後、梧陵が諸活動を開始した時期に近い。

三宅に限らず梧陵は、関寛齋など有望な蘭方医を支援し、緒方洪庵とも交流があり、お玉ヶ池種痘館が火災で

焼失した際には計七百兩にのぼる資金を拠出し、再建を援助するなど西洋医学に対する貢献も無視できない。

これらの事業は西洋医学の普及による社会的効用を重視して行われたのは勿論であるが、西洋医学の支援者になることによつて海外情報並びに人脈を得ることも重要な目的であつたと考える。一八五〇年頃から梧陵の人脈形成は本格化する。佐久間象山への入門と同時期、勝海舟への支援も開始し、その返礼の手紙が『勝海舟全集』に収録されている。⁽⁴³⁾

品々御送被下、千万忝存候、総州江御出張之趣、時下寒冷、折角御加養專一と奉存候。所在之英紙、懷中附木、御移之紙替に相呈候。御帰後御來訪相待候。早々不備。

廿三日

麟太郎

儀太郎様

梧陵は嘉永六年（一八五三）に儀兵衛を襲名するためこの手紙はそれ以前のものであると考えられる。

また、梧陵は三宅良齋を介して人脈を拡大する。梧陵が後に親友となる幕府の外交官僚田辺太一と知遇を得た

のは、良斎の仲介である（『濱口梧陵伝』六七頁）。田辺太一は後の老中小笠原長行に梧陵を紹介し、それを以下のように回想する。（『濱口梧陵伝』七一〜七三頁）

私は時々梧陵さんに會つて政治論や外交論を聞いたが、いつも進歩した意見を有つて居るので感服した。或る時幕府に勤めて居る若手の役人が十數名、小笠原壹岐守に呼ばれて御馳走になつた事がある。小笠原侯は當時老中であつたが、常に開國論を唱へて、却々進歩した考を有つて居た。其の席上で異國船の話が出たから、私は開國論を唱へ、海外諸國の事情を見ると、何れも門戸開放主義で、町内に住んで居る人が町内の交際をして居る様に交際して居る。然るに日本が獨り鎖國攘夷など唱へるのは時代遅れだと云ふやうな事を喋つた。すると小笠原侯は大に興がられて、其の説に賛成されたので、私は、今申上げた説は私の意見ではなく、實は私の友人濱口儀兵衛と云ふ者の意見で、今ちよつと受賣りをしたので御座います、と申上げた。所がそりや面白い男だ、一度會つて見たいと仰せられたので、其の後私は梧

陵さんを連れて小笠原侯の邸へ伺つた事がある。それ以來梧陵さんは時々小笠原侯に召され、いろいろな意見も述べ、随分知遇を受けた様である。

この記述は嘉永六年（一八五三）頃のこととされ、濱口梧陵の開國論が田辺太一を通して小笠原長行に伝わり、興味を持たれたことにより知遇を得たとされる。濱口梧陵の開國論は『濱口梧陵伝』以外では勝海舟の『濱口梧陵君碑』や以下の田辺太一⁽⁴⁾の全集でも言及される。

亦稱儀兵衛、號梧陵。好讀書廣交游。在嘉永安政間、天下以鎖國攘夷爲說。著之於書、騰之於口。紛紛擾擾。而梧陵獨持開國論、每晒此輩、爲怯懦類婦人。予時尚小、以所見相同、引爲忘年友。

亦た儀兵衛と稱し、梧陵と号す。読書を好み、交游を広くす。嘉永安政の間に在りて、天下鎖國攘夷を以て説と爲す。之を書に著し、之を口に騰す。紛紛擾擾。而して梧陵獨り開國論を持し、毎に此の輩を晒して、怯懦なること婦人に類すとす。予時に尚お小なく、見る所の相い同じなるを以て、引きて忘年の友と爲す。

当時の開国論は中国起源の華夷秩序的観点に依拠するものが多い。梧陵も漢学の影響を受けているが、その開国論は、華夷思想的要素が少なく實際的なものである。

そうした発想が生ずる背景には、当時の梧陵は、まず海からの脅威から自身の家や家業及び地域社会を守ることを最優先の課題としており、情報を蒐集した結果、海外の脅威は、津波に優先すると思えなくなったためではないかと考える。一方、梧陵とも親しい菊池海莊は、幕末を通して尊王攘夷の立場をとった。その理由の一つに海外製品と厳しい競争にさらされた砂糖販売業を営んでいたことが考えられる。その点、梧陵の家業の醤油業は海外製品とはほとんど競合しない。梧陵は海莊に比べ、商人が持つ商機に対する実利主義的発想を発揮しやすい立場にあった。それに情報蒐集により育まれた士大夫的博学さが重なってある種の合理的思考が生まれたと考える。

それは蔵書内容にも現れている。例えば、海保青陵関係書籍がそれである。本来儒学は国家による商業行為を嫌うが、海保青陵はそれを奨励した。近代的富国政策に

近い発想であり、青陵が儒学的経済論の最高峰と呼ばれる所以であるが、儒学としては異端で生前注目されなかった。梧陵がそれに注目したのは彼自身が商人的思考と士大夫的博学さを兼ね備える知識人であるからであろう。その思考は更なる情報の入手を促進し、それに伴い識者からも注目され、より一層人脈形成が促進されていく。

以上の点を踏まえ、濱口梧陵の情報需要主体化について私見を述べると、蛮社の獄以降、海外情報が発信されなくなり独自に海外情報入手せざるを得なくなった一八四〇年代の初めに萌芽が見られ、善光寺地震発生以降、海からの脅威への危機意識が高まるに伴い本格化し、独自のネットワークを拡大していったと考える。前者は三宅良斎との交流に代表され、後者は彼を媒介に万屋兵四郎・田辺太一・小笠原長行と交流を持つに至ったことがその典型である。

当時海防や兵学を含めた海外情報に精通することは自身の商品的価値を高める上でも最も有効な手段であった。百姓身分の梧陵にとっては、社会の上層に位置する勝海舟や田辺太一等の幕府官僚層や幕閣である小笠原長行と

交流を保つことは本来困難であるが、梧陵は海防関連書籍や兵書等の蔵書やその人脈から様々な情報を入手し自身の価値を高め、それを可能にしたと考える。

また、そのことは濱口梧陵が漢籍を中心にした大規模な蔵書を形成した理由にも関わる。近世における正当な学問は漢学であり、儒学的教養や作詩文の能力も含めた高い人文的教養が「身分や階層による分断を越えてコミュニケーションを成り立たせる共通言語としての機能」を持⁽⁴⁵⁾った。梧陵は特に『濱口梧陵伝』に「梧陵の学問は常に實際を主としたり。詩的情藻の豊かなる青年時代にあ⁽⁴⁶⁾りては、偶々詩作に耽りたる事なきに非ざりしも、詩は志を述ぶるに留めて、中年以後は全く之を廃したり。」と記されるように、実際の学問を重んじ、自身の政治上の立場の上昇も手伝って、地理学と共に歴史学、特に中国の歴史の学習を重視するようになる。

第三節 歴史学重視の要因

濱口梧陵が中国歴史学を重視した理由は、梧陵自身の政治上の境遇が挙げられる。梧陵は本来軍事や政治から

は隔絶された百姓身分であったが、幕末期には外国からの脅威に対応するために崇義団や浦組を組織する等、率先して郷土防衛にあたり、明治維新以後は和歌山藩政改革に指導者の一人として従事し、廃藩置県後は手腕が買われ、短期間ではあるが明治政府の駅通正（頭）にも抜擢される。江戸期に生を受けた梧陵からすれば、それらはいずれも過去の前例を探すことが容易ではない状況であったと考えられる。

梧陵は、学問を学ぶ意義を「抑も今の世に方りて爲すべきの事業枚舉に遑あらず。多々益々多岐に涉りて頗る望洋の思を免れざるなり。擇んで之に居らんとす。何を以て急とし、要とせん。曰く、學術經驗以て知識を開き、物理を明かにするのみ。之を捨てて他に據るべきの道あるを知らざるなり。」⁽⁴⁷⁾と述べる。それはそうした状況に対応する形で自身の学問を形成してきた彼の真情を吐露したものと考ええる。そうした梧陵の学問の性質は、蔵書内に史部に属する「唐本」が多いことと深く関係する。

なぜなら、外国の脅威や封建制から郡県制への改革、百姓身分の政治進出等の幕末期の状況は列島国家である

日本の歴史上には比すべき前例は少ないが、大陸国家である中国は、常に外からの脅威にさらされ、また、郡県制が確立された中央集権国家でもあり、科挙制度等により能力次第で社会的下層の者から指導者層への上昇も起こり得る。梧陵はそうした事例の中から実際に政治を行う上でのヒントを得ようとしたのではないかと考える。

それを跡付ける資料群として『世説新語補』二十巻が挙げられる。『世説新語補』は後漢から東晋に至る名士たちの逸話集『世説新語』に明代の王世貞が宋元期までの人物記事を増補したものである。王世貞は徂徠学派に強い影響を与えた人物で『世説新語補』も徂徠学派に重んぜられた。「濱口梧陵文庫」の『世説新語補』は三・四巻が欠けるものの、それ以外の巻には約三一〇〇〇字にのぼる書込みが記されている。そしてその中には

唐書、通鑑、晋書、後漢書、前漢書、孝經、莊子、宋史、隋書、蜀志（三國志）、韓非子、通雅、史記、太平御覽、宋書、綱目、文選、陸機洛陽記、書叙指南、蒙求、易坤（六五）、周礼、世説、詩（經）「大雅」、左氏傳、類書纂要、南史、齊書、唐類函、高僧傳、淮

南子、易經（易傳）、礼記、書經、孟子、字典、晏子、論語、列女傳、旧唐書、史記正義、字林、（孔子）家語、類篇、易解、正字通、唐詩選、說苑、洛陽伽藍記、魏書、凶会宝鑑、語林、公羊傳、字彙、一統志、禹貢、太玄經、爾雅、毛傳古、說郛、梁書、杜氏通典、文獻通考、典籍便覽、輟耕錄、本草綱目（集解）、北齊書、風俗通、茶經、經籍志、樂記、五雜俎、論衡、白居易詩、華嚴經、金剛經、顏子家訓、楞嚴經、水經注、說文、潜夫論、博物志、竹書紀年、西域記、綱目集覽、搜神記、臨洛錄（春秋）元命苞、三國志演義（蔡琰注）、

東坡詩集

等九十種にのぼる文献が引用されており、逸話の人物の伝や発言内容の典故などが詳細に調べられている。『世説新語』は後漢王朝が解体し、異民族の侵入や国家分裂が生じた時期の士大夫達の逸話を記したもので、増補された逸話も同様に士大夫達の逸話である。梧陵はそれらを自身のあり方の参考にしたのではないかと考える。「濱口梧陵文庫」は書籍を検索する上で必要な「目録学」の名著が充実し、儒学の経書関係はもとより史部や集部（類書・

叢書類)も充実している。『世説新語補』に残された大量の書込みを考慮すると「濱口梧陵文庫」が蒐集された理由の一つにその原典調べが考えられる。これらの研究は辞書類や類書等からの孫引きもあると考えられるが、それを考慮しても長期間を必要とすると思われる。

いつ頃行われたのであろうか。推定材料として字形がある。青年期と推定される『水経注』等の書込みは崩し字体が多いのに対し、晩年のものと考えられる『海国図志』等の書込みは楷書体であり、年齢により字形が変化する。『世説新語補』の書込みは前半の巻は崩れた字体が多いのに対し、後半になるほど整い楷書体に近くなる(写真(18))。そのことから『世説新語』の書込みは両者の中間の時期に書かれたと推定される。梧陵には文久元年(一八六一)から明治直前までの七年間目立った活動がなく、商売も隠居同然であったとされる期間がある。

この期間は目立たないが梧陵が蔵書を通して政治的教養を深め、明治以降の政治活動の基礎を築いた時期と考える。それを以下の下村房次郎の談話等から考察する。

濱口梧陵翁は漢學の素養深い人で、私なども折々話

を聞いて、得る所が多かった。或る時翁は、物事は何でも一面ばかり見てはいけぬ。表からも裏からも見ないと真相を知る事が出来ぬ。經學をやるにしてもさうだが、史傳を讀んでも、善人ばかり研究せずに、王安石の様な人も研究して見るが好いと云はれた。そこで私は王安石を讀んで見ると、成程其の人格はよくないけれど、其の遣り方は如何にも面白い。私は大に感心して翁に會つた時それを云ふと、翁は君の筆法を以てすれば、秦檜亦可なりだらうと云つて笑はれた事がある。(『濱口梧陵伝』四六〇頁)

王安石は中国北宋の政治家で改革者として有名。秦檜は南宋初期の政治家、反对者を弾圧し、北宋を滅ぼした金と和議を結んだ人物である。今日においては研究が進み王安石の改革は極めて先進的なものと再評価され、秦檜も現実的な采配を行った政治家として一定の再評価がなされているが、梧陵の時代はまだ王安石は旧法党と新法党の争いを引き起し、北宋が滅ぶ原因を作った人物、秦檜は異民族の金に妥協した売国奴の典型として評価されるのが一般的であった。彼等に対する人物評価を見る

と梧陵の中國史に対する造詣の深さがうかがえる。

なぜ、梧陵は王安石等を重視したのか。『世説新語補』卷二十の王安石の逸話について考察した下記の書込みが参考になる（写真（19））。

保甲團教云々 神宗熙寧三年王安石言、今欲公私財用不匱爲宗社長久計、當罷募兵用民兵、乃立保甲法十家爲保、五十家爲大保、聽自置弓箭習武、團教聚兵習武也。保馬開封府界諸縣保甲聽牧馬、令以陝西所市馬選給之、或官與其直令自市。市易法以內藏庫錢帛置市易務于京師、凡貨之可市及滯於民而不售者、平其價市之、願以易官物者聽。若欲市於官者則度其田宅或金帛爲抵當、而貨之錢責期使償、半歲輪息十一、及歲倍之、過期不輸、息外每日更加罰錢。收免役錢・免行錢・保甲錢、初權蜀茶、置賣塩場于永興軍。

保甲團教云々 神宗熙寧三年王安石言、今公私財用、匱しからざるの宗社の長久の計を為さんと欲す。當に募兵を罷め民兵を用いるべし。乃ち保甲法を立て十家を保と爲し、五十家を大保と爲し、自ら弓箭

を置き武を習うを聽（ゆる）す。團教は兵を聚め武を習うなり。保馬は開封府界諸縣の保甲、馬を牧すを聽す。陝西の市する所の馬を以て選んで之を給せしめ、或は官、其の直を与え自ら市せしむ。市易法、內藏庫の錢帛を以て市易務を京師に置き、凡そ貨の市すべき及び民に滯して售らざる者、其の価を平らげて之を市し、以て官物に易うるを願う者は聽す。若し官に市すを欲する者は則ち其の田宅或いは金帛を度り抵當と爲し、而して之に錢を貸し期を責めて償はしめ、半歲息を輪すこと十に一、歲に及べば之に倍す、期を過ぎ輪せざれば、息外に毎日更に罰錢を加へ、免役錢・免行錢・保甲錢に收む。初めて蜀茶を權し、売塩場を永興軍に置く。

保甲法云々から始まる書込みを説明するにあたり、保甲法が制定された背景や保甲法の内容を知る必要がある。保甲法は北方の遊牧国家である遼・西夏の強大化とその圧迫を宋が受けていた状況を背景に実施された兵制である。宮崎市定氏は以下のように説明する。

中國の兵制は古來次第に變遷して來てゐるが、概し

ていえば唐以前は国民皆兵の主義の上に立っていた。

(中略) 宋から州の長官を知州というようになり、その指揮する廂軍は実は軍事教練を受けていない人夫であって、戦争に耐える禁軍は中央に直属して、臨時にそこへ駐屯しているに過ぎない。兵事と民事が判然と分離して来た。それと同時に各州の防禦に關しても中央が全責任を負わねばならなくなった。そして中央における軍政の弛廢と共に禁軍が遊惰無能となり、素質が低下するとその数を増加して兵力を補わねばならなくなる。職業軍人であるから戦争が済んでも即座に解散帰農せしめることができない。かくして兵数が次第に増加して朝廷の財政を圧迫した。北宋も中期以後この弊が甚だしく財政の八割は、冗兵を養う費用に当てられるという状態であつた。

紊亂した財政を整理しようとすれば、必然的に軍備整理に取りかからねばならぬ。冗兵を如何に始末す可きかは現今の中華民國において大問題であるが、手のつけようのない難問とされている。王安石の考えでは畢竟傭兵制度を採用する以上はこの解決は難かしい。

どうしても唐以前の国民皆兵主義に則らねばならぬとの結論であつた。(中略)

宋代にも全然国民兵がなかった訳ではない。敵寇を蒙ることの多い地方には義勇、弓箭手などという人民の団結があつて、時には政府から強制的に徵發されて、禁軍と共に国境警備に当たつていたのである。しかも彼等はい実際に使つて見ると中々成績が宜しい。驕慢な禁軍よりも役に立つという評判であつた。王安石はかかる民兵を養成して、次第に禁軍に代え、古の兵農合一に復歸しようと試みたのである。⁽⁴⁶⁾

保甲法が實施された背景は、幕末明治初期の日本の状況と類似する。紀州の状況を例にとると、黒船来航以後兵制改革の必要性は強く認識されていたものの、常備軍たる武士への世録支給などが財政を圧迫し、抜本的な改革には踏み切れず明治維新を迎えた。明治初め和歌山藩は第二次長州征伐で露見した兵の弱体化や財政の悪化などを背景に、封建制から郡県制への変革を意圖した大規模な藩政改革を實施する。⁽⁴⁶⁾ 明治二年(一八六九)二月藩主は自俸を二十分の一に減額し、家格に応じて知行(世祿)

を大幅に減ずる禄制を導入し、和歌山藩政改革を開始する。⁽⁵⁰⁾ その一環で兵制改革が実施され、明治三年に公布された「兵賦略則」は、武士中心の兵制に代わる国民皆兵制であり、廃藩置県後、政府が明治六年に制定した「徴兵令」のモデルケースとされ、歴史的にも重要な意義を持つ。

梧陵はそれに先立つ明治元年（一八六八）に藩主に対して「農兵制」を上言した。梧陵の農兵制は「全國皆兵制論にして、現在に於ける徴兵制の基礎とも云ふべし。」とされ、『濱口梧陵伝』にその全文が収録されている。⁽⁵¹⁾ 梧陵は明治元年十二月に勘定奉行に拔擢されて以後、学習館知事に任命され、学制改革を主導するなど、藩政改革の首脳の一人であり、また、有田・名草民政局知事などを複数兼務するなど藩政改革の趣旨を各地方に浸透させる中継役の役割も果たしていく。兵制改革にも影響を与えた可能性がある。

変革期に王安石が注目されるのはたびたび見られる現象である。大戦前の昭和十六年佐伯富氏は日本最初の学術的な王安石評伝を刊行し、以下のように記す。⁽⁵²⁾

王安石に関する伝記はこれまでに幾度か作成されているが、その書かれた時代はおおむね国家的にあるいは社会的にエポックメイキングの時期に当たっている。その著作の目的は種々異なっているにせよ、その背景の時代が、国家的にも社会的にもゆきづまっていたということは確かな事実である。（中略）かかる現象は王安石と各著者との時代が幾百千年の星霜を隔てていても、社会的にあるいは国家的に見て、そこに何か一脈相通ずるところの類型的な社会相ないし国家的危機が潜んでいたからである。つまり近代人の感覚に触れるところの社会的欠陥と王安石の時代のそれとが相類似したものがあつたからである。

近代以降王安石が注目されるきっかけを作った人物に近代中国を代表する知識人である梁啓超がいる。梁啓超は一九〇八年に『王安石評伝』を発表し、王安石を「国史の光」とよび、特に軍制改革は、反対党に阻まれなければ、世界の模範になるものとなつたであろうと高く評価した。⁽⁵³⁾ 評価した理由は梁啓超自身も師の康有為等とともに清末の改革「戊戌の変法」の指導者であつたからで

ある。「戊戌の変法」は日清戦争での敗北の危機感から一八九八年に実施された立憲君主制の樹立を意図した改革で、科挙制の廃止、近代学校制度の樹立、満州人の特権的生活保護の停止、産業や軍隊の近代化を一度に実施しようとした大改革である。⁽⁵⁴⁾

「戊戌の変法」は余りに急進的であったため、実施後百日でクーデターが起こり挫折するが、その手法は以後の改革でも踏襲され、中国の本格的な近代化の先駆けとなるものであった。梁啓超は改革の先達として王安石を重視したのである。時代は遡るが、梧陵の王安石研究も同様に藩政改革の参考とされたのではないか。

濱口梧陵が首脳の一として参画した和歌山藩政改革は、武士の世録廃止、徴兵制の導入、四民平等の学制の導入等先進的な改革であり、改革そのものは廃藩置県により途絶するが、廃藩置県以後の明治政府の諸政策の有力なモデルケースとなった。戊戌の変法ともその内容や近代化に果たした役割など類似する点が多い。

梧陵の王安石情報の入手先として有力なのは徂徠学派である。徂徠学派の思想は、王安石と類似する所が多く、

特に海保青陵は王安石を「スサマジキ政事名人」とよび高く評価した。⁽⁵⁵⁾「濱口梧陵文庫」には海保青陵の著作の最大級のコレクションが現存する。

王安石の変法が海保青陵等の徂徠学派を媒介に発掘されたと考ええると藩政改革にも繋がる可能性が出てくる。藩政改革の中心人物として知られる津田出も梧陵と同じ徂徠学派であり、梧陵とともに経国党とよばれる党派を形成したからである。⁽⁵⁶⁾津田出も藩政改革の前例として注目した可能性はある。

加えて、『世説新語補』等の梧陵の蔵書には王安石の変法をはじめ中国の変革期の諸政策を研究した跡と考えられる書き込みが多数見られる。それらは藩政改革参画後の多忙期に行うのは困難であり、農兵制の上言時期を考慮するとそれ以前からなされたのではないか。梧陵は藩政改革の指導者として頭角を現し、一時はその手腕を買われ、明治政府の駅通頭にも抜擢される。それが可能であったのは、以前から政治を研究していたのも一因ではないか。蔵書に遺された書き込みはその跡と考える。

以上のことから濱口梧陵の中国地理学・歴史学の研究

は梧陵の社会活動や政治活動の根本となる思想や発想のベースとなったと考えられる。それがどの程度、梧陵自身の具体的な社会・政治活動の手法や和歌山藩政改革等の諸政策に直接影響を与えたかは、個々の政策と蔵書中の書き込み等を詳細に比較検討する必要があるが、廃藩置県以後の日本の近代化のあり方にも関わる問題であり、より一層研究をすすめていく必要がある。

後年になる程、濱口梧陵の地理学の学識と政治上の要請は結びつき、梧陵の学問に一種の地政学的要素が付加されるようになる。次節ではそれについて記述する。

第四節 濱口梧陵思想の地政学的転回

濱口梧陵の学問及び政治上の姿勢について『濱口梧陵伝』に以下のように記す。⁽⁵⁷⁾

彼は常に人に語つて曰く、「世界の大勢を知らんと欲せば先づ其の地理を知らざる可からず。地理を知らずんば政治を語る能はず、地理を知らずして政治を行はんとする者は燈なくして闇夜を行くが如し。」

政治を行う上で地理学は不可欠な分野とする。中でも中

国地理学を重視し、後年その興味は欧米諸国のアジア侵略という状況を背景に中央アジアや東南アジアまで拡大する。その理由を『濱口梧陵伝』所収の金子弥平の手紙では以下のように記す。⁽⁵⁸⁾

就中成吉思汗（元太祖）マホメットに對して一種の御思想を抱持せられ、人をして十分に其事蹟を調査研究せしめんとすの御考も被在候事など有之、此事も東亜西歐兩大陸の歴史上にも地理上にも、政治宗教上にも、大關係を有する事故、御祖父様が歐米御漫遊の後、中央亜細亜を跋涉して蒙古を過ぎ、支那に入りて歸途に就かんとすの御考被為在候も、右成吉思汗、マホメットの事蹟に付趣味を感じられ居りし事一因なるべしと奉存候。尤も故御祖父様の中央亜細亜を跋涉して見んとすの考は、其當時英露の二強國は互に其國力を中央亜細亜に發展し、其餘威を以て東方亜細亜にも爪牙を加へんとする折柄なりし故、其邊の消息をも實地に就き視察せんとの御考被為在候事は勿論の義に有之。

また、『濱口梧陵伝』所収の田辺太一（蓮舟）の談話に

も次の記述がある。

早い頃梧陵さんの外國へ行つて見たいと思つたのは、勿論世界の大勢に通じ、直接西洋文明を研究せんとする希望から出たのであるが、人の知らぬ處、餘り人の行かぬ處へ行つて見たいと云ふ好奇心も餘程多かつた様である。だから其の後印度や西藏へ行つて、人の知らぬ古い文明や、變つた風俗習慣を見て來たいと云ふので、頗に其の邊の地理などを研究して居た事がある。思ふに、支那經營論などをして居た所から見ると、印度や西藏の研究も好奇心のみからではなく、國際的に此の方面へ手を伸ばす必要を感じて居た為であつたのかも知れぬ。⁽⁵⁹⁾

このような記述がある一方で實際どの程度の水準で、どのような書物を研究したのか確たる証拠はなかった。しかし、『地球説略』や『海国図志』、『資治通鑑』等に大量に発見された書込みがその裏付ける資料となり得る。例えば、『資治通鑑』の記された以下の書込みでは、中央アジア（西域地域）の地理考証を行っており、金子弥平の証言を裏付ける（写真（9））。

西域地域に関する梧陵の考証。

成則按ずるに南山は于闐ホータンの南に在る者、即ち葱嶺パミール一高原一の中幹の東のかた昆崙山脈に出づ。北山は車師コンロンの北に在る者。即ち天山「山脈」なり。亦た葱嶺パミールの中幹は昆崙と南のかた大戈壁タクラマカン「砂漠」を隔てて相いな駢なび東に出づ。此れ車師の前の王庭を言うなり。後庭は今の烏魯木齊ウルムチ。河源は喀什噶爾カシュガル（疏勒）の西南、天龍池より出づ。即ち今の哈刺庫爾カラコルムを云う。于闐ホータン以西、水皆西流するとは非なり。于闐は葱嶺の東に在り、休循以下五国は葱嶺幹中に在り、或いは西南は古の西北印度の地なり。葱嶺より源を發し西に注ぐ大なる者とは印度河インダス（西恒河）・阿母河アム（縛菊河ヴァクシュ）なり、印度河、南流して西印度海に入る。阿母河アム、西流して筏注を出で、北のかた阿剌爾湖アラールに入る。

また、『海国図志』にも梧陵（本名成則）の署名含む以下の書き込みがあり、チベットやインドの地理研究を行っていたという田辺太一の談話を裏付ける（写真（8））。

『海国図志』卷十三 東印度 梧陵の地理考証
成則按ずるに内河は即ち怒江（サルウィン河）、源

を怒夷〔雲南少数民族〕に発し、南詔〔雲南〕の西
界自り阿瓦〔ミャンマー北部〕を経て海に入る。海
口は或は云う小金沙江と。恒河は即ち安日河、源を
西北に発し、中印度 アラハールバード allahpat 及び パトナー patan を経て
加爾谷他に抵る。東のかた海口に入り雅魯藏布江と
合し海に入る。海口は即ち大金沙江。

更に、『地球説略』での考証は主に東南アジア地域であ
り、これに『水経注』などの研究を加えるとアジアのか
なりの部分を覆う。中国以外のアジア地域の研究がなさ
れた時期は、田辺太一の証言に「早い頃」と対比して「そ
の後」とあり、梧陵の蔵書中、出版年が最後の書籍は明
治十四年（一八八二）出版の引田利章『安南史』であり、
『地球説略』にも安南に関する大量の書込みもあること（写
真（20））、晩年梧陵は世界旅行に旅立つこと等からそれ
に近い時期を中心に行われたと考えられる。

このように、「濱口梧陵文庫」が形成された理由を地理
的要因、人脈面、政治上の要請、地政学的転回の面から
考察した結果、まず現時点の仮説として梧陵の学問は青
年期に地理研究を始め、中年期以後歴史学（政治）に研

究分野が拡大し、老年期にはその二つが結び付き地政学
的転回をしたと考える。

「濱口梧陵文庫」は梧陵の学問上・政治上の参考資料群
の性質を有するものであり、彼にとつて学問とは現実の
問題意識を前提とし、その問題解決のため深化させてい
ったものであるという点は、ある程度確認できたと思われ
る。その意味で彼の学問は「知行合一」的であると言える。
このような彼の知識形成のあり方は中国の知識人の影響
を強く受けていると考えられる。

それは近年上田純子氏が庶民教育を含めた儒学の普及
と対外危機とその国家的対応をめぐる問題の発生を背景
に「寛政期（十八世紀）以降、幅広い階層への儒学の普
及によって、武士と上層庶民のなかに儒学的教養を持
った知識人層が形成されてくると、その一類型として、中
国の士大夫をモデルとする知的エリートが現れる。この
士大夫型知識人の特徴は、作詩文の能力を含めた儒学的
教養と知的洗練に加え、天下国家に対する強い使命感と
経世済民の信念を持つことである。故に、これに分類さ
れる知識人は、当然の帰結として政治的主体化を志向す

る。」とする指摘とも符合し、梧陵はむしろ士大夫型知識人の典型と言っている人物である。⁽⁶⁰⁾

濱口梧陵と同時代の人で日本近代化の先導者であった福沢諭吉は漢学等の旧来の学問に手ぬかりしい立場を取った人物であり、『濱口梧陵伝』所収の松山棟庵への手紙では次のように漢学者を酷評している。⁽⁶¹⁾

此まで漢學者流の惡風にて、書を貴び文を重んずる杯と唱へ、聖人の道は高しとて平人を導くを知らず。殆んど仙人の境界に安んじ、さて其の書は何物と尋ねるに、數萬卷の書にあらず。僅かに數十卷の書を數百度も繰返し、所得は唯スレープの一義のみ。

しかし、同じように教養の基盤を漢学に置いていたものの濱口梧陵に対する福沢諭吉の評価は異なったものであった。そのことは明治十七年梧陵渡米の際に息子福沢一太郎へ送った手紙を見ると明らかである。

此人ハ少年ノ時ヨリ文ニ志シ、洋書コソ読マザレトモ博識ノ士ナリ。面会之節ハ随分礼を尽シテ応接可被致候。諭吉又記。⁽⁶²⁾

このように梧陵は欧文が読めなくても福沢に博識の士

として礼を尽くすべき対象とされるほど教養の深い人物であった。少なくとも現在残る「濱口梧陵文庫」はまぎれもなく万卷楼と呼べる規模であり、濱口梧陵は宮地正人氏のいうところの「強烈な情報需要主体」であったといえる。⁽⁶³⁾そして、また、「濱口梧陵文庫」は近世から近代の移行期に梧陵が強烈な情報需要主体に成長していく過程を考察する上で掛け替えない資料群であると考ええる。そして梧陵は明治以後和歌山を代表する指導者となり、「情報発信主体」として成長していく。それが最も現れるのが彼の晩年である。

第三章 晩年の諸活動と後世への影響について

第一節 世界一周旅行と途上での客死

明治十七年（一八八四）五月梧陵は世界一周旅行を思い立ち、横浜を出帆し、最初の目的地アメリカに到着し、翌年四月二日にニューヨークで六十六歳で逝去する。

この旅の目的は西洋文明の繁栄を見るときともに、自身

の研究対象であったアジア地域の実際の風俗等を見るためであったと考えられるが、その途上でこの世を去ったため以後どのような形で梧陵が学問・思想を発展させ、政治上に活かしていくつもりであったかはついに知る事はできなくなった。しかし、その下準備の研究は蔵書内に多数の書込みという形で残されている。これら一つ一つの内容を検証していくことは今後の濱口梧陵研究の大きな課題であると思われる。

一方、濱口梧陵は、知識人や政治家として和歌山を中心に大きな影響力を持っていたため、彼の世界一周旅行への旅立ちとその途上での死は関係者に衝撃を与えた。

梧陵の遺骸は棺に入れられて帰国し、横浜で勝海舟や福沢諭吉等に出迎えられ、その後、故郷の広村で六月一四日に葬儀が行われた。会葬者は数千人に上り、同地方では未曾有の規模となった。出棺の際は四千人以上がその列に従ったと伝えられる。その人数は幕末期に三百戸程度であった広村の人口をも上回る規模と考えられる。

また、陸奥宗光は梧陵と親交があり、梧陵渡欧の際はともに旅行することが予定されていたが、事情により先

に渡欧することとなり、後日に旅立った梧陵の到着を待つ心境を妻の亮子あての手紙で吐露している。例えば、明治十七年六月十八日付の手紙には以下の記述がある。

浜口も昨今はサンフランシスコに着き候ことと存じ候えども、未だ何の沙汰もこれなく候。しかし近日面会候えばその地模様きき申すべくと相樂しみおり候。⁽⁶⁴⁾

また、ニューヨークでの梧陵の客死を知らされると、妻あてに明治十八年六月四日にベルリンより二通の手紙を送り哀悼の意を伝えるよう細かく指示している。

浜口死去のこと気の毒に候。定めて香奠など御遣わし候ことと存じ候。我らよりも悔み申し遣わし候段、誰ぞ使いに御申し遣わしなさるべく候。⁽⁶⁵⁾

今朝一書さし出し候のちなお相考え候。浜口とは從來心易くいたし候ことゆえせめて悔み状にても遣わし候方と存じ、別紙相認め候間、同人相続人儀兵衛へ御届けなさるべく候。儀兵衛ことは当地東京滞にか銚子におり候か和歌山におり候か、東京の店にて御聞き合わせなさるべく候。⁽⁶⁶⁾

福沢諭吉も梧陵の世界一周旅行の相談を受けた一人であ

り、明治十八年四月二十五日に息子一太郎あての手紙の中で以下のように述べ梧陵の死を悼んでいる。

浜口翁本月廿一日紐育府ニ而死去之趣、電信到来。

誠ニ絶言語驚入候次第、拙者ハ実ニ悲嘆ニ不堪。此人ハ壮年之時より人之爲ニ者大ニ力を尽し、様々功ある人物、六十余歳ニ而渡米を思立、其志之壮なる、尋常人之及ぶ所に非ず。回顧すれば今を去ること二十余年、鉄砲洲住居之時、貴様の生れた年か其翌年か、松山氏が同道して、是が紀州之浜口儀兵衛と申人で御座ると紹介したる其時之顔色ハ、今尚眼中ニあり。誠ニ残念とも氣之毒とも申様無之。⁽⁶⁷⁾

梧陵の世界一周旅行や梧陵の死去とそれに伴う広村で実施された未曾有の規模の葬儀という一連の動向は、旅行の支援者福沢諭吉が創刊した『時事新報』や地元紙『和歌山日日新聞』等で報ぜられ、その時期、梧陵の情報発信力はピークに達したとも言える。

第二節では梧陵が行った教育支援や情報発信及びその蔵書が次世代の知識人に与えた影響について考察する。

第二節 次世代の知識人への影響

濱口梧陵は慶応二年（一八六六）に学校「耐久社」を設立する。耐久社規則に「朝野雅俗ヲ問ハズ貧富貴賤ヲ論ゼズ且居常読書ノ閑暇ナキ者ト雖トモ篤志ノ人ハ皆入社ヲ得ベシ」とあり、あらゆる階層の人に開かれた学問所をめざして創設され、梧陵は「耐久学舎に梧陵文庫を設け」⁽⁶⁹⁾、その蔵書は学徒に向けて公開された。

明治二年（一八六九）四月二三日和歌山藩は藩校学習館の改革を行い、学習館知事濱口梧陵が改革を指導した。梧陵は耐久社の創始者として有名だが、県の教育の近代化にも大きく貢献した。これにより学習館に「農工商」の身分の者も入学が可能になり、学校の定にも「生徒貴賤を論ぜず、四民同胞凡の次第は等級」と定めて、希望者には蔵書の貸し出しも認められた。また、学習館には国学、漢学、洋学が置かれ、ここで学んだ優秀な人材を秘書寮に入れ、官吏に登用する道も開いた。⁽⁷⁰⁾さらに、梧陵は親交のあった福沢諭吉の協力を得て、英語学校を創設するなど、県の教育の近代化に取り組んだ。

明治十二（一八七九）年県民の公選による最初の県会

が和歌山師範学校講堂（旧藩校学習館）を借り開かれ、濱口梧陵が最初の議長に選出される。初代県会は県立学校費の増額という県教育史上注目される決定を行っている。

同年に和歌山県会と共に和歌山師範学校内に設立された和歌山最初の本格的な公立中学校である県立和歌山中学校は、設立当初経営基盤が脆弱で開校時の入学生一二六人中卒業した者は十人と極めて不安定であったが、この決議により教師二人の増員、九月より入学生三十五名の増員、書籍機械費の増額、寄宿舎建設が決定された。

和歌山中学校五十周年記念誌にも「五月 始メテ縣會ノ開カレタル際、經費ヲ地方税ノ負擔トシテ、豫算ヲ提出セシニ、縣會ハ更ニ擴張ヲ講ジ經費追増ノ決議ヲナセリ」とそれを特記している。⁽⁷⁾ その後も博物標本室の増設が実施される等、学校としての体裁が整い、創設当初においても博物学者南方熊楠や地理学者小川琢治等著名な学者や戦前の代表的な新聞記者の一人で『濱口梧陵伝』の著者である杉村広太郎等の知識人が輩出された。

南方熊楠は、和歌山中学校で博物学の師鳥山啓と出会

う。熊楠は和歌山中学校第二期卒業生とされ、⁽⁷⁾ 初代県会の教育費増額で追募した九月入学生である可能性も高い。梧陵の教育支援は次世代の和歌山の知識人達に、潤沢では無いが必要不可欠な学習基盤を提供した。

熊楠と梧陵の関係については、熊楠の日記の一八八五年六月十四日付の記事には「故浜口梧陵氏葬式、有田郡広村にて行ふ。」と記され、一八八六年五月三日付の記事には梧陵の渡米時の写真を見たことが記される。⁽⁷⁾

有田病院長小林山郷を訪ひ、浜口梧陵米国より齎来せる写真を見る。市街、山岳、江海のみなり。

熊楠が梧陵の動向に注目していたことが伺え、熊楠は同年十一月に梧陵の後を追うようにアメリカに渡航する。

それに関連して『和歌山日日新聞』明治十八年（一八八五）六月十七日付には、アメリカの旅行の際に梧陵が発した興味深い移民論が紹介されている。⁽¹⁴⁾

米國の土地沃饒にして遺利多しとは豫て聞き及びたる事なるが、今之を目撃するに及んで、其の聞きに優れるを覺ゆ。然るに我が國の人々にして渡航するもの、何れも滞留僅に二三年乃至五六年の短期

間に過ぎず。匆々にして歸り來り、土地狭く人口多き國內にて再び食を爭ふが如きは、餘りに量見の狭きものと云はざる可からず。氣力なきか、忍耐なきか、働きなきか、資材なきか、何等かの缺乏するものがあるが爲なるべし。渡米の希望なきか又は渡米する能はざるものは姑く措く。苟も然らざる限りは、此處に來りて耐忍勉勵せば、必ず巨利を占め、大志を遂げ得べし。今老生の如き、漸く此處に來ると雖も、恨むらくは前途短くして爲す可き事なし。故郷に於ける有爲少壯の士の奮つて渡航し來らん事を望んで止まず云々。

この記事は六月十四日に梧陵の葬儀が盛大に舉行された直後に紹介されたもので、梧陵の県民に対する事実上の遺言的な機能を果たしたものと考えられる。そして和歌山では南方熊楠を皮切りに明治育ちの世代の知識人が成長し、各界に進出していくことになる。

中でも、和歌山中学校の熊楠の二年下の後輩で日本近代地理学の創始者の一人である小川琢治（一八七〇—一九四一）は梧陵文庫の影響を大きく受けた人物である。

小川琢治は紀伊国田辺藩の儒学者浅井篤の子で、一九〇八年京都帝国大学において日本初の地理学講座の初代教授に就任。創成期の日本の地理学を牽引した。中国古代史の貝塚茂樹、物理学の湯川秀樹、中国文学の小川環樹など各分野を代表する学者の父としても知られている。小川は幼少期に父の浅井篤が耐久社の教師であったため、濱口梧陵の書庫に出入りでき、小川はそれに関して自叙伝で以下のように述べる。

中學教育を受けるまでに、四書・五經の一部分を先考から口授された外は、講讀の机邊に蹲踞くまつて傍聴したのみで、好書の癖はその入學の前年に、先考が故濱口梧陵翁の歿後その創立した有田郡廣村耐久舎（今の耐久中學校の前身）で教鞭を執つた際、梧陵翁の收藏した漢籍の填つた書庫に出入する自由を得たのに起因してゐる。當時判りもせぬ杜佑の通典や知不足齋叢書の雜書を引出して見たり、南監本二十一史の中の後漢書・三國志・晉書などを讀んで乏しい家蔵に見られぬ珍書と思つてゐた。（中略）自發的に興味を感じる方向に深く入つて見る性癖は幼

少の頃現代式の教育の感化を受ける前に出来上つてゐたと言へないでもない。近來、特殊の事項を問題として研究するに當つて、何時も自分の判斷して正當と想へるものを考究して或る結論に達した後に、文献を涉獵して先覺者の提示した事實とその判斷及び考説を参照して補正するといふ風に、多くの學徒の辿るのと反對の行き方を遣つてゐるが、是は今述べた性癖に職由するのである。

小川は自身の研究スタイルの原点を耐久舎における濱口梧陵の蔵書の独習等に求める。また小川の子、貝塚茂樹は以下の証言をしている。

これは父がいつも言っておりましたけれども、濱口梧陵の持つていた漢籍を勝手に読むことができて非常に幸せであつたと。

梧陵文庫は小川に最初の本格的に漢籍に触れる機会を提供した。⁽¹⁵⁾

そして彼が独習したものが漢籍だったことは興味深い。なぜなら小川琢治が最も得意とした分野は中国歴史地理学であり、『中国歴史地理学研究』初集、続集は合計千頁

以上にのぼる彼の代表作である。また、昭和期を代表する地理学者小牧実繁は「先生が一ばん得意なのは、やはり中国の歴史地理関係のことですね。たとえば、「支那上古の地誌としての禹貢と山海経の価値」（中略）この当時ヨーロッパの地理学者で漢文を読めるものはいなかったでしょうから、中国のこういうことを―それが特殊講義の地理学史にも出てきたわけですが―やれる学者は、世界中で小川先生ただお一人で、またたいへん独創的なものです。」と学術的な価値を称賛している。⁽¹⁶⁾

さらに小川の代表作とされる中国最古の地理書『山海経』の研究と梧陵蔵書の繋がりも注目される。島津俊之氏はその論稿「小川琢治と紀州」で耐久中学校創立七十年記念式典での小川の講演において梧陵の蔵書の中に『文献通考』や『通典』とともに『山海経』なども収蔵されていたと発言していたことを紹介する。⁽¹⁷⁾

それを踏まえ梧陵蔵書内の『山海経』を探索したところ既述のように随所に書き込みが見られ、書き込みがなされた時期もわかる。また、『山海経』が収蔵されている同一の木箱内には中国の中世の代表的地理書である『水

経注』も含まれており、『水経注』にはほぼ全頁にわたって句読点が付され、書込みも見られる他、閲読の時期も記されている（写真（6））。これらの書き込みは小川琢治の目にも触れられていた可能性も高い。

小川琢治が耐久舎に出入りできた期間は十三歳から十四歳で県立和歌山中学校に入学するまでの一年間と長くはないが、そこでの体験は以後の研究スタイルに影響を与えたことは小川自身が認めるところであり、梧陵文庫を検討した結果、そのみならず研究の方向性をも少なからず既定した可能性が出てきた。小川自身が本稿でも紹介した各地理書の書込みをどこまで閲読可能であったかは、現状定かではないが、その大部分を閲読することができたなら小川琢治は自分のほるか以前に地理学研究を進める先駆者の存在に驚嘆したことであろう。『濱口梧陵伝』四六一頁の記述に「梧陵は若き頃より地理学に興味を有し、殊に我が國と直接関係多き朝鮮及び支那の地理に對しては、多大の努力を傾けて研究し、専門の學者をして驚嘆せしむるものありき。」と記される。

日本初の地理学講座の設置は一九〇八年で、そもそも

『濱口梧陵伝』出版当時（一九二〇年）において専門の地理学者はそういない。『濱口梧陵伝』の著者杉村広太郎（一八七二年生れ）とは同世代とともに和歌山中学校出身の小川琢治である可能性は十分に考えられる。

明治初期の和歌山では博物学・民俗学の南方熊楠や地理学の小川琢治、ジャーナリズムの杉村広太郎等各分野を先導した知識人を輩出した。濱口梧陵は彼等の先駆者と言える知識人であり、教育者であった。「濱口梧陵文庫」は彼の学問・思想を現代に伝える幕末明治初期の民間人蔵書の巨峯とでもいふべき内容を持つ蔵書である。

梧陵の思想・学問や彼の蔵書が次世代の和歌山出身の知識人に与えた影響に関しては不明な点も多い。最もその影響が判明している小川琢治にしても、島津俊之氏等の先駆的な研究はあるものの、そのテーマが「小川琢治と紀州」であり、濱口梧陵側の史料についてはほとんど言及していない。小川琢治や南方熊楠、杉村広太郎などはそれぞれ各界を代表する知識人であるだけに今後より一層研究を深化させていく必要があると考える。

おわりに

本論では、濱口梧陵の蔵書の内容とその形成過程を中心に論じてきた。

第一章第一節では「濱口梧陵文庫」の唐本書籍群の特徴を考察した。その規模は大大名の蔵書にも匹敵し、特に史部系書籍の充実は突出しており、目録学・歴史書・地理書各分野における通史的網羅性の面でも際立っており、武英殿本等大大名でも入手困難な書籍もある。これらの書籍は藩校や大名蔵書ならまだしも個人蔵書家が網羅的に蒐集している点は傑出している点と考えた。

第二節では「濱口梧陵文庫」内の和書について紹介した。

第一項では海保青陵関係書籍を紹介し、それは全国的に青陵が知られる前では最大級のコレクションであることを提示した。第二項では「古碧吟社」関係書籍の著作を紹介し、それらは当時の有田地方の漢学の水準を伺い知るうえで重要な著作であることを提示した。第三項では海防・兵制関係書籍を紹介し、梧陵はペリー来航以前よ

り海防関係の書籍から海外情報を得、独自の開国論を展開したこと、「濱口梧陵文庫」には改革当時の兵書が大量に残され、全国的にもほとんど現存しない書籍も多数含まれる。これらは兵制改革期の軍事教練の内容を知るうえで重要な資料となり得ることを提示した。

第二章では梧陵が多くの情報を入手し得、求めた理由を蔵書の形成過程を中心に考察した。

第一節では地域における資本形成を考察した。当時有田地域は漁業・醤油・砂糖・書籍等の分野で、全国的にもまれな大規模な資本形成が見られた地域であったことを提示した。梧陵の地理学重視の理由を故郷広村の地勢的要因によると考え、中国地理学の興味や梧陵の広村の救済活動の始まりは一八四七年まで遡り、蔵書の書き込みには中国の治水や万里の長城関係のものも多い。救済活動が始まった原因は一八四七年三月に発生した善光寺地震が考えられることを指摘した。こうした活動は、明治以後の梧陵の政治進出の礎となっていく。

第二節では梧陵の人脈形成について考察した。地域社会での人脈に加えて、全国的な書店や知識人達とも交流

を持ち、民間では国内有数の書籍ネットワークを有する人物となる一方、幅広い人脈を形成して海外情報を入手し、実際的で合理的な開国論を展開し、幕府官僚や幕閣層との関係を維持できる人物に成長したことを論述した。

梧陵が大規模な海防書や兵書を蒐集した理由については、当時海防や兵学に精通することは自身の商品的価値を高める最も有効な手段であり、唐本の蒐集の背景も近世における正当な学問は漢学であり、身分や階層の分断を越える共通言語としての機能を持ったためと考えた。

第三節では、梧陵の中国歴史学重視の理由を考察した。外国の脅威や封建制から郡県制への改革、百姓身分の政治進出等の当時の梧陵が置かれた状況に対して、中国での前例をも研究し対応したこと、『世説新語補』には大量の書き込みが残され、中でも王安石の改革の調査をその具体的例に挙げ、それらは和歌山藩政改革の際に参考にされた可能性があることに言及した。

濱口梧陵の中国地理・歴史の研究は梧陵の社会・政治活動の根本となる思想や発想のベースとなったと考える。他方、それが及ぼした影響の深さについては、今後一層

研究をすすめるべき課題であるとした。

第四節では濱口梧陵の地理学の学識と政治上の要請は結びつき、梧陵の学問は地政学的な転回をし、考察対象は欧米諸国のアジア侵食という状況を背景に中央アジアや東南アジアまで拡大した。『地球説略』『海国図志』『資治通鑑』等への書込みがそれを裏付ける。

以上、考察の結果、まず梧陵の学問は青年期に地理研究を始め、中年期以後歴史学（政治）に研究分野が拡大し、老年期にはその二つが結び付き地政学的転回をしたと考えた。「濱口梧陵文庫」は学問上・政治上の参考資料群の性質を有するものである。彼にとつて学問とは現実の問題意識を前提に、その問題解決のため深化させていったものであり、「知行合一」的なものであることは相当程度確認できたと考ええる。

蔵書内容や書込み等の内容は『濱口梧陵伝』に収録された史料の内容とも合致し、その学問形成のあり方は中国の知識人の影響を受けた士大夫型知識人の典型であることを指摘した。以上の考察から「濱口梧陵文庫」は濱口梧陵が強烈な情報需要主体に成長する過程を考察する

上でも重要な資料群であることは明示できたと考える。

第三章では、晩年の諸活動と後世への影響について考察した。第一節では、晩年の世界一周旅行とニューヨークでの客死について叙述し、この旅の目的は西洋文明の繁栄を見るとともに、自身の研究対象であったアジア地域の実際の風俗等を確認するためであったと考えた。

その途上で梧陵はこの世を去るが、書込みとして残された彼の研究の一つ一つの内容を検証していくことは、今後の研究の大きな課題であると思われる。他方、濱口梧陵は、知識人や政治家として和歌山を中心に大きな影響力を持ち、その死は和歌山関係者をはじめ福沢諭吉や陸奥宗光にも衝撃を与えた。また、梧陵の世界一周旅行や梧陵の死と、広村でとり行われた未曾有の葬儀という一連の動向は、旅行の支援者福沢諭吉の創刊した『時事新報』や地元紙『和歌山日日新聞』等で報ぜられ、梧陵の情報発信力がピークに達した時期とも言える。

第二節は、梧陵の次世代の知識人への影響を考察した。梧陵は「耐久社」の設立と蔵書の公開、藩政改革期の学制改革、初代県会議長として県立学校費の増額などを行

い、次世代知識人を輩出する上での教育基盤を整備した。中でも地理学者小川琢治は幼少期直接、梧陵の書庫に入りでき、そこでの体験は研究スタイルや研究の方向性にも影響を与えた可能性がある。「濱口梧陵文庫」は梧陵の学問・思想を現代に伝える幕末明治初期の民間人蔵書の巨峯というべき内容を持つ蔵書である。梧陵の思想・学問や蔵書が小川琢治や南方熊楠、杉村広太郎などの次世代の知識人に与えた影響に関しては、より一層研究を深化させていく必要がある。

今後の課題は、まず、「濱口梧陵文庫」の調査を完成させることを最優先としたい。特に本論では当時の知識人の通常の教養に属する儒学の経書や和書の大部分については、十分に言及できていないことから、それらも含めて全般的な分析をする必要がある。

また、本論でも述べたように、濱口梧陵は和歌山藩政改革に参画し、初代和歌山県会議長に選出される等、和歌山を代表する政治家・指導者に成長する。それは豪農商層の政治進出の先駆となる出来事であり、その時期の梧陵の思想的転回や蔵書の活用及び次代の知識人への影

響について検討をより一層進めていきたい。その際重要になるのは蔵書に遺された書込みの解析と他史料との照合である。

そして、地域の歴史を刻む蔵書等の史料は濱口梧陵の蔵書に限らず各地に存在している。紀中地域で言えば宮地氏によって紹介された『彗星夢雑誌』をはじめ、『古歴概要』等研究への利用が進んでいない史料も多数ある。

他方、近年、和歌山県立文書館「和歌山県歴史資料アーカイブ」で広村の歴史を伝える史料『夏の夜がたり』や県立耐久高等学校所蔵の「耐久梧陵文庫」の内容が公開される等、史料利用面の利便性は確実に向上している。

「濱口梧陵文庫」の調査が完了した次の段階では、それらとの比較照合と史料の発掘が重要であり、それらを統合して同地域の豪農商が「情報需要主体」として成長する過程を明らかにし、近代化のモデルケースとして提示していきたい。特に梧陵以前の状況の解明は梧陵が「士大夫型知識人」に成長していく理由を考察する上でも重要であり、それについては別稿を準備している。

こうした事例研究が各地で集積されれば、かつて宮地

氏が「風説留」の研究を統合し幕末の豪農商の情報ネットワークの存在明らかにしたように、江戸期後期から明治期にかけての全国的な豪農商の「情報需要主体」化の過程を説明できる可能性がある。濱口梧陵とその蔵書の研究はそれを行う上で重要な材料になるだけの潜在力を有していると考ええる。

注

- (1) 展示の一部(パネル展示)は文書館HP (<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjo/>)で公開中。
- (2) 杉村広太郎『濱口梧陵伝』濱口梧陵銅像建設委員会一九二〇年
- (3) その他の先行研究は濱口恵璋『感恩碑の由来』一九三三年、杉村広太郎『濱口梧陵小伝』濱口梧陵翁五十年祭協賛会編 一九三四年、翠村隠士「紀州藩学の変遷を略述し浜口梧陵の学風に及ぶ」『紀州文化』二、一一 一九五六年、府川源一郎「稻むらの火」の文化史」久山社 一九九九年、戸石四郎「津波とたたかった人 浜口梧陵伝」新日本出版社 二〇〇五年、川村純一『濱口梧陵と医学』崙書房出版 二〇〇八年、白岩昌和「箱作黄金松に秘められたメッセージ…『稻むらの火』に語られなかった未来への教訓」大阪民衆史研究六八 二〇一三年、同「濱口梧陵と海を渡った先駆者たち」紀州経済史文化史研究所紀要四〇 二〇一九年、同「濱口梧陵生誕二〇〇年記念寄稿―米国に残された濱口梧陵の足跡を探して―」『大阪民衆史研究』七二 二〇一九年等がある。

- (4) 宮地正人「幕末政治過程における豪農商と在村知識人―紀州日高有田両郡を視座として―」『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店 一九九九年
- (5) 宮地「幕末維新期の社会的政治史研究」、岩田みゆき『幕末の情報と社会変革』吉川弘文堂 二〇〇一年、常松隆嗣「幕末維新期における豪農の活動と情報―丹波の豪農園田家を中心に―」近世地域史フォーラム三「地域社会とリーダーたち」吉川弘文堂 二〇〇六年 参照
- (6) 宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質―「公論」世界の端緒の成立―」『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店 一九九九年 一三三、一三六、一三七頁
- (7) 岩下哲典「江戸情報論」北樹出版 二〇〇〇年 三四、三六頁
- (8) 宮地正人『幕末維新変革史』上 岩波書店 二〇一二年 一一八、一二〇頁 同上「風説留から見た幕末社会の特質」一三七頁、桐原健真「松陰の本棚 幕末志士たちの読書ネットワーク」吉川弘文館 二〇一六年、工藤浩平「近世蔵書文化論 地域〈知〉の形成と社会」勉誠出版 二〇一七年
- (9) 小林文雄「近世後期における「蔵書の家」の社会的機能について」『歴史』第七六輯 一九九一年 二九、三〇頁
- (10) 足代弘訓「伊勢の家苞」『日本芸林叢書』五 一九九二年 六合館所収 二頁、岡村敬二「江戸の蔵書家たち」吉川弘文堂 二〇一七年
- (11) 宮崎市定「中国文明の歴史9 清帝国の繁栄」中央公論新社 二〇〇〇年 二四二、三頁（原書は『東洋の歴史・第九巻 清帝国の繁栄』人物往来社 一九六七年）
- (12) 常松「幕末維新期における豪農の活動と情報」一七九頁
- (13) 杉村「濱口梧陵伝」四五九頁
- (14) 広川町誌編纂委員会『広川町誌』下巻 一九七四年 八六六頁

- (15) 弥吉光長「唐本の輸入と販路の考察」『弥吉光長著作集 第三巻 江戸時代の出版と人』（日外アソシエーツ株式会社 一九八〇年）二五二頁
- (16) 倉石武四郎「目録学」『東洋学文献センター叢刊影印版Ⅰ 汲古書院』一九七九年
- (17) 井波陵一「知の座標 中国目録学」白帝社 二〇〇三年 五〇、六一頁
- (18) 崔富章「关于《四库全书总目》的定名及其最早的刻本」『文史』二〇〇四年
- (19) 神田信夫・山根幸夫編『中国史籍解題辞典』一九八九年 燎原書店 二五六頁
- (20) 清馬斉輯『万寿盛典』首都図書館蔵本影印 一九九六年 北京古籍出版社 序言
- (21) 杉村「濱口梧陵伝」二九六頁
- (22) 杉村「濱口梧陵伝」四六一頁
- (23) 吉田俊純「日本近世経済思想史研究」明石書店 二〇一八年 一一一頁
- (24) 海保青陵著、上田貞次郎翻刻『富貴談』商学研究一（二） 一九二二年
- (25) 杉村「濱口梧陵伝」三一六、一三七頁
- (26) 貴志康親「紀州郷土藝術家小伝全」（国書刊行会 一九七五年）の内「続編」二六頁（原書は一九三四年に刊行）
- (27) 宮地「幕末政治過程における在村知識人」一六五頁
- (28) 岩下哲典「普及版 幕末日本の情報活動「開国」情報史」雄山閣 二〇一八年 一四六頁
- (29) 杉村「濱口梧陵伝」三八頁
- (30) 阿部龍夫「塩田順庵と海防彙議」無風帯社 一九五一年 七、七三頁
- (31) 和歌山県『和歌山県史』近世史料一、一九七七年 一四頁
- (32) 垣内貞「四代須原屋茂兵衛北圃恪齋」一九九七年 一五頁

- (33) なお、白岩氏は「箱作黄金松に秘められたメッセージ」(一〇五頁)で広村堤防へ防潮林を植えた発想を身につけた背景について「濱口梧陵文庫」から知識を得たと推定する。
- (34) 杉村「濱口梧陵小伝」二六頁
- (35) 内閣府「報告書(1847 善光寺地震)」二〇〇七年四八頁、一一三、四頁 内閣府防災情報ページ
- (36) 『広川町誌』上巻 広川町誌編纂委員会 一九七四年六七三、六頁
- (37) 杉村「濱口梧陵伝」四一頁
- (38) 菊池三九郎「談櫺」巻四 一九一四年 第十蒙師功績 柑園失業 押為蒙師。諸少年鍾於其門、薰化數年。人材彬郁。濱口梧陵以經世、濱口熊嶽以蓄財、岩崎明岳以製醬、古田咏處以遊藝、各揚特色異彩。
- (39) 杉村「濱口梧陵伝」四七八頁、垣内貞「四代須原屋茂兵衛北園格斎」
- (40) 杉村「濱口梧陵伝」福田兵四郎は四一八、二三頁、秋田屋は一七〇、一頁参照。
- (41) 杉村「濱口梧陵伝」二三七頁収載「庚午日記」に「世界國尽」新著福沢(諭吉 より達)とす。「庚午日記」は明治三年正月の一月間を記した現存する唯一の梧陵の日記。なお福沢からの送付と推定される『世界國尽』は「濱口梧陵文庫」に現存する。
- (42) 杉村「濱口梧陵伝」四二二頁
- (43) 江藤淳編「勝海舟全集別巻 来簡と資料」講談社一九九四年 六〇九頁
- (44) 田辺蓮舟「蓮舟遺稿 文」一九二二年 国会図書館デジタルコレクション 一二二頁
- (45) 上田純子「儒学と真宗説法―僧月性と幕末の公論空間」『公論と交際の東アジア近代』二〇一六年 六一頁
- (46) 杉村「濱口梧陵伝」四六〇頁
- (47) 杉村「濱口梧陵伝」三二〇頁

- (48) 宮崎市定「北宋史概説」『宮崎市定全集10宋』岩波書店一九九二年 三三、三四頁。初出は『世界文化史体系』二(誠文堂新光社、一九三五年)。
- (49) 津田出「壺碑」青木藤作 一九一七年 二五、二六頁
- (50) 堀内信「晦結溢言」下 和歌山県立図書館 一九七三年 一九、一五一頁、初版は蔵経書院より一九〇七年発行。
- (51) 杉村「濱口梧陵伝」二二三、二九頁
- (52) 佐伯富「王安石」中央公論社 一九九〇年 九、十頁(原書は一九四一年富山房刊)
- (53) 梁木啓超「王荊公」(台湾第二版) 一九六六年台湾中華書局、一、一三頁
- (54) 東一夫「王安石 革新の先覚者」一九七五年 講談社 四六、四九頁
- (55) 瀧本誠一「日本経済叢書」巻十八 一九一九年所収「稽古談」一九一頁。東一夫「日本中・近世の王安石研究史」一九八七年 風間書房 第二編第四章参照。
- (56) 津田出の自伝「壺碑」一頁、『紀州徳川近政記』(山口県文書館蔵毛利家文庫七五維新記事雜録)参照。
- (57) 杉村「濱口梧陵伝」四六二頁
- (58) 杉村「濱口梧陵伝」四六六頁
- (59) 杉村「濱口梧陵伝」四二五頁
- (60) 上田純子「儒学と真宗説法―僧月性と幕末の公論空間」五三頁、六九頁
- (61) 杉村「濱口梧陵伝」三〇五頁
- (62) 福沢諭吉「福沢諭吉書簡集」第四巻(岩波書店 二〇〇一年) 一四六頁
- (63) 宮地「風説留から見た幕末社会の特質」参照
- (64) 『日本の名著35 陸奥宗光』中央公論社 一九七三年二九四頁、渡米中の梧陵については白岩氏の論稿が詳しい。
- (65) 『日本の名著35 陸奥宗光』三一九頁

- (66) 『日本の名著35 陸奥宗光』二三〇頁
 (67) 『福沢諭吉書簡集』第四卷 二七〇頁
 (68) 『広川町誌』下巻 四〇〇頁
 (69) ヤマサ醤油(株)『ヤマサ醤油店史』一九七九年 一〇四頁
 (70) 堀内信『南紀徳川史』十七冊 清文堂出版 一九九〇年
 (71) 五三、六二頁 (原書は南紀徳川史刊行会が一九三〇、一九三三年に刊行)
 (72) 和歌山県教育委員会『和歌山県教育史 第三巻 史料編』二〇〇六年 一二、五頁、和歌山県立和歌山中学校内、浅井忠『回顧五十年』一九二九年 一頁
 (73) 和歌山県立桐蔭高等学校ホームページ
 (74) 南方熊楠『南方熊楠日記1 1885-1896』一九八七年 八坂書房 三二頁、七一頁
 (75) 杉村『濱口梧陵伝』四六七、八頁
 (76) 小川琢治『二地理学者の生涯』弘文社印刷所 一九四一年 二、三頁。また、貝塚茂樹の証言は(東方学会『東方学回想Ⅱ 先学を語る(2)』刀水書房二〇〇〇年 五頁)
 (77) 日本地理学史料調査委員会『小川琢治先生と京都大学の地理学教室—小牧実繁先生を囲む座談会—』地学雑誌 九三—三 一九八四年 五五頁
 (78) 島津俊之『小川琢治と紀州—知の空間論の視点から—』地理学評論八〇—一四 二〇〇七年 八九〇頁
- 【参考文献】※注に掲載したものの以外
 今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』日本放送出版協会 一九七七年
 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所 一九六七年
 高橋智『安井家の蔵書について—安井文庫研究之二—』斯道文庫論集三五 二〇〇〇年

【蔵書目録】

- 濱口恵璋『梧陵文庫蔵書分類目録』耐久社記念館再建委員会 一九六〇年
 石黒文吉『尊経閣文庫漢籍分類目録』一九三四年
 鹿児島大学附属図書館『玉里文庫漢籍分類目録』一九九四年
 金沢市立図書館『蒼龍館文庫目録』一九六八年
 佐賀県立図書館『佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録—一般資料(和書 漢籍編)—』一九八一年
 静岡県立図書館『静岡県立図書館蔵 江戸幕府旧蔵図書目録』
 ・・葵文庫目録』一九七〇年
 壺井義正編『関西大学泊園文庫蔵書目録』一九五八年 関西大学学術リポジトリ掲載分
 名古屋市蓬左文庫『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』名古屋市教育委員会 一九七五年
 南葵文庫『南葵文庫蔵書目録』凸版印刷株式会社 一九〇八年
 佛教大学『佛教大学附属図書館所蔵 貴重古典籍目録』二〇一二年
 宮城県図書館『伊達文庫目録』(特殊文庫目録第三) 一九八七年
 龍谷大学『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録』一九九七、二〇〇一年
 和歌山大学附属図書館『紀州藩文庫目録』一九七一年

【参考データベース】

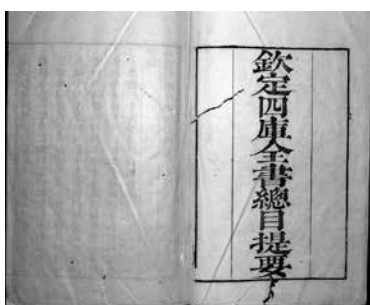
- 京都大学東方文化研究所漢籍データベース、
 国文学資料館 日本古典籍総合目録データベース、
 台湾故宫博物院ホームページ、中貿聖佳ホームページ

参考写真

(1) 「二十一史」収納箱



(2) 『欽定四庫全書總目提要』扉題



(3) -1 天禄彬狼書目



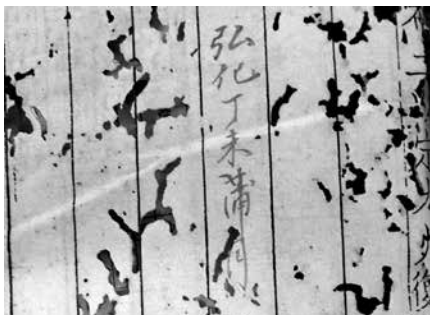
(3) -2 天禄彬狼書目 敲雲書屋藏版



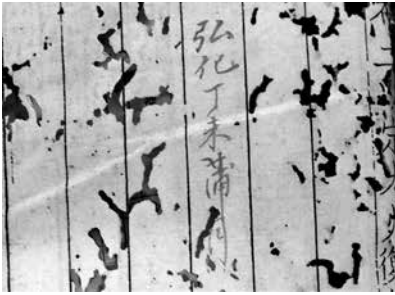
(4) 「万寿盛典初集」卷四一



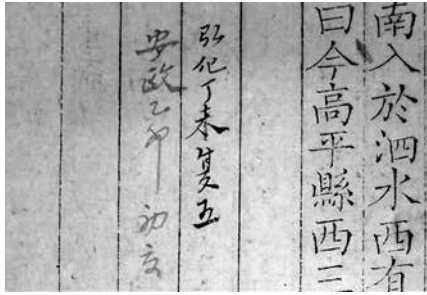
(5) 『西清古鑑』卷六



(6) -1『山海經』 卷十八 書込み



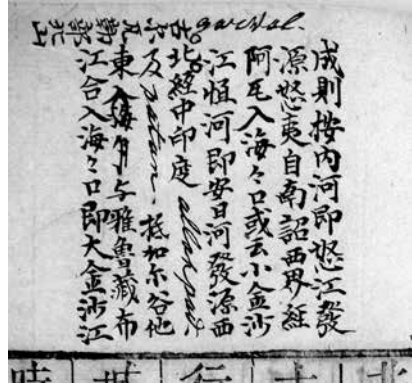
(6) -2『水經注』 卷二五 書込み



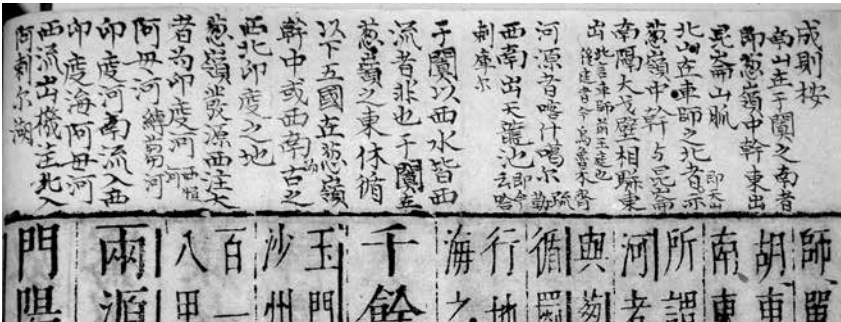
(7)『地球説略』 梧陵の書込み



(8)『海国図志』 卷十三梧陵 (成則) の署名有



(9)『資治通鑑』 卷二十 漢武帝紀 梧陵 (成則) 書名有



(10) 『富貴談』



(11) 『古碧吟小藁』



(12) 『海防統彙議』 卷五

海防臆測上

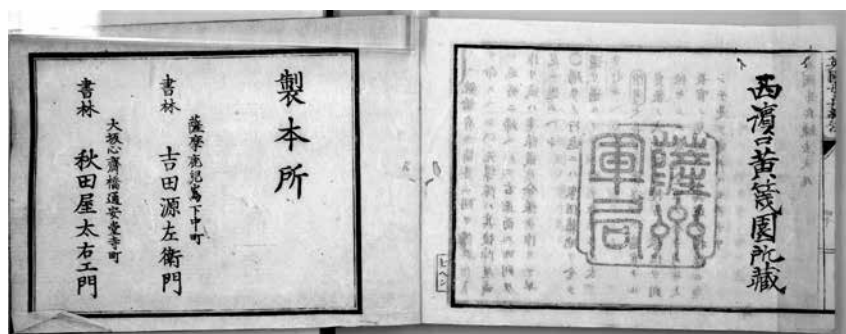


(13) 『ウェルウンストヒュールエルゲン』 巻一

(14) -1 福沢諭吉訳『雷銃操法』
『学習館記』印有(14) -2 渡部一郎譯『陸軍士官必携』
『和歌山藩秘書寮蔵書印』有

(14) -3 赤松小三郎訳『英国歩兵練法』全九冊

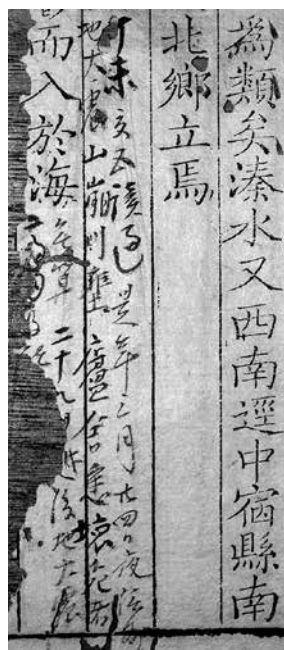
慶応三年刊 西濱口黄箒園（栢陵）所蔵



(15) 『水経注』卷五 禹王（大禹）の治水に関わる書込み。



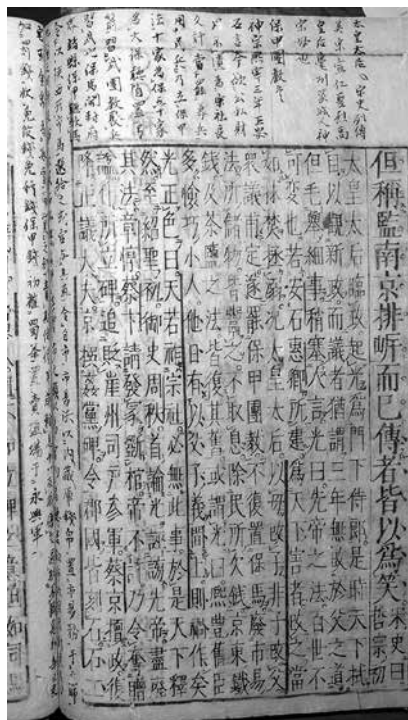
(16) 『水経注』卷三八 善光寺地震書込み



(17)『水經注』 卷三
始皇帝の長城に関する書込み



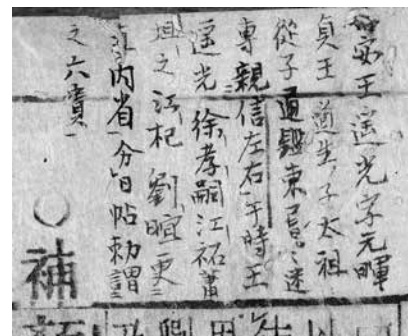
(19)『世説新語補』 卷二十
王安石の変法に関する書込み



(18) -1『世説新語補』 二巻 書込み



(18) -2『世説新語補』 二十巻 書込み



(20) -1『地球説略』安南国（現在のベトナム中部）
に関する地理考証



(20) -2『地球説略』安南国記載部分を拡大表示

細取之可爲甚好之服。
 安南國圖説 又名古史記云城又安南又曰扶南其國在交趾之南
 在亞細亞東南邊線自赤道北九度起至二十三度止經線中
 京偏西七度起至十四度止綿亘三千里廣遠六百里總計四
 方里東南部界海西界暹羅國北界大中國國內分爲三小國
 至歐寄有馬牛羊豕雞鴨等獸大鵝野鴨而獸中有一種大牛尾極
 長極大取之可爲犀角之飾又有一種鹿名香麝一值半毛有極
 其纖細取之可爲甚好之服
 安南國又一名古史記云城又安南又曰扶南其國在交趾之南
 在亞細亞東南邊線自赤道北九度起至二十三度止經線中
 京偏西七度起至十四度止綿亘三千里廣遠六百里總計四
 方里東南部界海西界暹羅國北界大中國國內分爲三小國
 至歐寄有馬牛羊豕雞鴨等獸大鵝野鴨而獸中有一種大牛尾極
 長極大取之可爲犀角之飾又有一種鹿名香麝一值半毛有極
 其纖細取之可爲甚好之服
 安南國又一名古史記云城又安南又曰扶南其國在交趾之南
 在亞細亞東南邊線自赤道北九度起至二十三度止經線中
 京偏西七度起至十四度止綿亘三千里廣遠六百里總計四
 方里東南部界海西界暹羅國北界大中國國內分爲三小國
 至歐寄有馬牛羊豕雞鴨等獸大鵝野鴨而獸中有一種大牛尾極
 長極大取之可爲犀角之飾又有一種鹿名香麝一值半毛有極
 其纖細取之可爲甚好之服

史 部														集 部							四庫分類	合計	備考
地理書							武英殿本							類書・叢書							書籍種類		
地球図説	海国図志	山海経	水経注	太平寰宇記	廣輿記	歴代地理志 原編今釋	万寿盛典 初集	西清古鑑	南巡盛典	文苑英華	太平御覧	冊府元亀	津逮秘書	説郭	淵鑑類函	讀史廣 叢書	全唐文	書名					
1 巻	50.60, 100 巻	18 巻	40 巻	200 巻	24 巻	20 巻	120 巻	40 巻 + 16 巻	120 巻	1000 巻	1000 巻	1000 巻	752 巻	120 巻	450 巻	64 冊	1000 巻	巻数	最大 76				
1856 年刊	1842 年刊	未詳	524 年頃	宋代	1600 年頃	1837 年刊	1717 年刊	1749 年刊	1771 年刊	987 年	983 年	1013 年	明末	元末明初	1710 年刊	1799 年	1814 年刊	出版(成立)年					
○万屋兵四郎旧蔵	△1847 年 60 巻	○1753 年 清刊	△1753 年 清刊	○1803 年 清刊	○典輿図編纂明版	○1837 年 序刊	○1717 年 序刊	△1749 年 序刊	○1771 年 序刊	○1567 年 明刊	○1807 年 宋本重刊	△1672 年 清刊	○明崇禎汲古閣刊	△1646 年 清刊	△1710 年 序刊	○1799 年 序刊	○1814 年 序刊	○漢口植樹文庫	65.0	参考数値			
△1860 年 撰作版	△6 0 巻本 清刊 欠巻有	○明嘉靖 17 年刊	○1615 年 序明刊	○1793 年 清刊	○盛文典明版	○1837 年 序刊	○清康熙刊殿版	○清乾隆刊殿版	○1771 年 序殿版	○1567 年 明刊	○明嘉慶刊本	△1642 年 明刊	○明崇禎汲古閣刊	○明末刊	△1710 年 序刊本	○1799 年 序刊	○1814 年 序刊	○国立公文書館(内閣文庫)	61.5	紅葉山文庫、昌平坂学問所蔵書含む。			
○1856 年 聖経書房	○1849 年 60 巻	○万庭樞宗吉刊	○1615 年 序明刊	○1793 年 清刊	○明刊	○1888 年 清刊	△41.42 巻のみ	○1890 年 銅版	○1771 年 序殿版	○1567 年 明刊	△1818 年 宋本重刊	△1642 年 明刊	○明崇禎汲古閣刊	△1646 年 清刊	△1710 年 序刊本	—	○1814 年 序刊	○東京大学附属図書館	59.5	南英文庫含む			
×清光緒刊	○清光緒刊 百巻	○明嘉靖刊 覆宋	△清乾隆刊	△清刊	△清嘉慶刊	△清同治刊	○清康熙刊	○清乾隆刊	○清乾隆刊	○明隆慶刊本	○宋刊本 残 466 巻	○明崇禎汲古閣刊	○明刊 有刻	○清康熙刊	△清刊	○清嘉慶刊殿版	○清嘉慶刊殿版	○静嘉堂文庫(岩崎家蔵書)	57.0	清末四大蔵書家陸心源蔵書含む。			
△1860 年 撰作版	△1852 年 百巻	○明刊	△清乾隆刊	△1793 年 清刊	△1686 年 清刊	△1870 年 清刊	—	○乾隆刊	○1771 年 序刊副本	○1567 年 明刊	○明隆慶刊本	△1642 年 明刊	○明崇禎刊	△1647 年 清刊	△1710 年 武英殿版	○清嘉慶刊	○乾隆清刊 副本	○国立国会図書館	57.0	—			
×1864 年 撰作版	○1849 年 60 巻	○明胡文煥刊	△1585 年 明刊	○宋本残 25 冊	△1802 年 清刊	—	—	○1888 年 石版	—	○1567 年 明刊	○宋刊本	×清写本	△1630 年 明刊	△清順治刊	○清康熙版	○1799 年 序刊	○1814 年 版	○宮内庁書陵部	55.5	—			
—	○日本 嘉永版	○明 吳珵本	○明万曆刊	○明鈔本 脚本	○明刊	—	—	○清乾隆版	—	○1567 年 明刊	○明嘉慶活字版	○明崇禎版	○明崇禎汲古閣刊	△清順治刊	○清康熙版	—	○清嘉慶版 会尊経閣	○前田育徳会尊経閣	54.0	加賀前田家蔵書			
×清光緒刊	△1844 年 50 巻	○明 吳珵本	○1615 年 序明刊	○1793 年 清刊	○典輿図編纂 明版	△1870 年 清刊	—	○1751 年 内府本	×奉勅撰 刊本	○1567 年 明刊	△1818 年 宋本重刊	○應請鈔本 補景祐刊	○明崇禎汲古閣刊	○明刊本	△1710 年 清鈔堂刊	○1799 年 序刊	○1814 年 内府刊	○京都大学附属図書館	53.5	—			
○1856 年 聖経書房	△1847 年 60 巻	○明万曆 21 年刊	△1585 年 明刊	△1793 年 清刊	△1686 年 清刊	△1842 年 蘇氏刊	△	△1751 年 銅版	△1771 年 刊本	○1567 年 明刊	△1818 年 宋本重刊	△1672 年 清刊	○明崇禎刊	△清初刊	△1710 年 内府刊	△清刊	○1818 年 内府刊	○東洋文庫	52.0	「万寿盛典」△は「-94」-と別に論文に所蔵情報有			
○1856 年 聖経書房	△1852 年 百巻	△1811 年 刊本	△清乾隆刊	△1793 年 清刊	△1802 年 清刊	△1888 年 清刊	—	△1892 年 日本版	—	○1567 年 明刊	△1573 年 刊本	△1672 年 清刊	—	△1646 年 清刊	△1710 年 清鈔堂刊	—	×1901 年 清刊	○鎌倉大学附属図書館	36.0	写字台文庫含む			
○1856 年 聖経書房	△1844 年 50 巻	○王崇慶 1619 刊	△明刊本	—	○明万曆 28 年刊	—	×1879 年 刊本	—	×1882 年 刊本	×明刊 残 25 巻	△1812 年 宋本重刊	△1672 年 清刊	—	○明刊本	—	○1799 年 序刊	○清嘉慶内府刊	○関西大学附属図書館	35.0	泊園文庫(幕末期大阪最大規模の漢学塾の蔵書)を含む。			
—	×日本 嘉永版	○明万曆刊 本	○明万曆刊 本	—	—	—	—	—	—	○1567 年 明刊	○1573 年 序明刊	○明鈔本	△1630 年 明刊	○明刊本	△1710 年 序刊本	—	—	○名古屋市 蓬左文庫	35.5	尾張徳川家蔵書含む。			
○1856 年 聖経書房	△1849 年 60 巻	×1875 年 清刊	—	○1803 年 清刊	△清乾隆 9 年刊	△1870 年 清刊	—	×1907 年 石印	—	—	△1818 年 宋本重刊	△1672 年 清刊	—	△清順治 修	△1710 年 序刊	—	○1814 年 殿版	○東京都立中央図書館	34.5	—			
—	△1847 年 60 巻	△清嘉慶刊	△1753 年 清刊	—	△1686 年 清刊	—	—	×1890 年 銅版本	—	—	×1892 年 宋本重刊	×1754 年 清刊	—	—	○清聖祖 定刊本	○1799 年 序刊	○1818 年 内府刊	○山口大学附属図書館	27.0	徳島堂(徳山毛利家)文庫、明倫館文庫含む。			
○1856 年 聖経書房	×1855 年 銅屋版	△乾隆 黄成刊	△清乾隆刊	—	△1802 年 清刊	—	△1717 年 内府刊 41.42 巻 欠	×1892 年 日本版	—	—	—	—	—	△1646 年 清刊	—	—	○1814 年 内府刊	○宮城県立図書館	25.5	伊達文庫含む			
△1860 年 撰作版	△1847 年 60 巻	—	△1753 年 清刊	—	—	△1870 年 清刊	—	—	—	—	×1861 年 日本版	—	—	—	×定刊本	—	○1814 年 殿版	○鹿児島大学附属図書館	19.5	玉里島津家文庫含む。			
○1856 年 聖経書房	×1854 年 日本版	×刊本不明	△1753 年 清刊	—	—	×1903 年 清刊	—	—	—	—	△1812 年 宋本重刊	—	○明刊	△1657 年 清刊	△1710 年 序刊本	—	—	○和歌山大学 紀州藩文庫	17.5	紀州藩校学習館蔵書含む。			
△1860 年 撰作版	×1854 年 日本版	△1667 年 清刊	○1615 年 序明刊	△1882 年 清刊	△1686 年 清刊	△1888 年 清刊	×1879 年 刊本	—	×1882 年 刊本	—	×1892 年 刊本	—	—	—	—	—	—	○佛教大学附属図書館	15.5	—			
—	×1854 年 日本版	—	×1888 年 清刊	—	—	○1837 年 序刊	—	—	—	—	—	—	—	—	△奉勅撰 刊本	—	—	○佐賀県立図書館	10.5	鍋島家文庫含む			

後世の版本ないし刊本不明、欠巻が多いため×としたものを0.5点として計算している。

全国所蔵状況調べ（唐本）

四庫分類	史 部																															
書籍種類	目録学					正史		編年体		紀事本末						制度史																
書名	四庫全書 総目	欽定天祿 琳琅書目	也是園 蔵書	集刻書目	四庫未収 書目提要	二十一史	明史纂	資治通鑑	資治通鑑 外紀	宋元通鑑	通鑑紀事 本末	通鑑紀事 本末前編	通鑑紀事 本末宋編	通鑑紀事 本末元編	明朝紀事 本末	聖武記	通典	文獻通考	統文獻 通考	聖朝經世 文編												
巻数	200 巻	10 巻	1 巻	10 巻	2 巻	2559 巻	310 巻	294 巻	10 巻	157 巻	42 巻	1 2 巻	10 巻	4 巻	80 巻	14 巻	200 巻	348 巻	254 巻	120 巻												
出版（成立） 年	1772 年 成	1775 年 成	清初成	1799 年	1822 年		1723 年 成	1084 年 成	北宋	1626 年	1174 年 成	明万曆頃	明万曆頃	明万曆頃	1658 年	1842 年 刊	801 年成	1317 年	1586 年	1827 年												
漢口植楠文 庫	○	1795 年 浙江本	明治初 以前刊	江戶明治 期写本	1799 年 序清刊	江戶明治 期写本	○	明萬曆 刊本	清雍正刊	1629 年 序刊	1811 年 清刊	1626 年 序刊	1607 年 明刊	1642 年 明刊	1605 年 明刊	1606 年 序刊	1658 年 清刊	1842 年 序刊	1611 年 1748 年 殿版	1603 年 序刊	△	清道光 刊										
国立公文書 館（内閣文 庫）	×	清・日本 写本	○	清写本	×	1818 年 日本版	—	△	明南監本 康熙修	清敬慎堂 刊本 7 巻闕	1625 年 明刊	○	明刊	1626 年 序刊	△	論正 明刊本	清刊	△	1605 年 明刊	○	明刊	△	清刊	×	1842 年 序刊	△	1603 年 序明刊	○	清道光 7 年刊			
東京大学 附属 図書館	○	乾隆 武英殿刊	清・日本 写本	—	1820 年 清版	1888 年 刊本	△	明南監本 康熙修	清雍正刊	1544 年 明刊本	1811 年 清刊	1626 年 序刊	○	明萬曆刊	1617 年 明刊	○	明萬曆刊	1658 年 清刊	1844 年 琉璃殿刊	1539 年 明刊・殿 本有	△	明萬曆 刊本	1603 年 序明刊	○	清道光 6 年刊							
静嘉堂文庫 （岩崎家藏 書）	×	文化 2 年 官版	△	山田九折 写	1910 年 清刊本	1818 年 日本版	×	清刊	△	明南監本 清修	清康熙刊	○	宋版本 有闕	○	明刊	明天啓刊	明萬曆刊	—	○	明萬曆刊	明萬曆刊	△	日本 弘化版	清道光 刊	元刊・殿 本有	○	元刊・殿 本有	明萬曆刊	○	清道光 7 年刊		
国立国会 図書館	×	文化 2 年 官版	△	江戶写本	△	江戶写本	1799 年 序清刊	1878 年 刊本	1701 年 刊本	△	康熙敬慎 堂刊	1625 年 明刊	1871 年 清刊	1626 年 序刊	1873 年 清刊	—	1605 年 序刊	1606 年 序刊	1658 年 序清刊	1846 年 重訂	1539 年 明刊	1519 年 明刊	1603 年 明刊	○	清道光 7 年刊							
宮内庁 書陵部	×	文化 2 年 官版	1884 年 刊	○	清写本	1818 年 日本版	1822 年 清版	△	明萬曆北 監本	清康熙版	1625 年 明刊	—	○	明版	△	論正 明刊本	—	○	明官版	明萬曆版	清順治版	清道光版	宋刊本	元刊明修	○	明萬曆刊	○	清道光 7 年刊				
前田育徳会 尊経閣	○	乾隆 刊	1884 年 刊	—	—	清光緒版	—	○	明萬曆版	清雍正刊	○	明應請版	明崇禎版	明萬曆刊	明萬曆刊	○	明官版	明万曆刊	清順治版	清道光版	明應請版	△	明應請 刊本	○	明萬曆刊	○	清道光 刊					
京都大学 附属 図書館	○	1772 年 勅撰刊本	1884 年 刊	△	1910 年 清刊本	1799 年 序清刊	1925 年 刊	△	明南監本 康熙修	清敬慎堂 刊本	1625 年 明刊	1811 年 清刊	1626 年 序刊	1887 年 清刊	—	1887 年 清刊	1887 年 清刊	1887 年 清刊	1842 年 序刊	○	明應請版	1519 年 明刊	1603 年 明刊	○	清道光 6 年刊							
東洋文庫	○	乾隆 武英殿刊	1838 年 写	△	1910 年 清刊本	1820 年 日本版	1878 年 清刊本	△	明萬曆監 本	清敬慎堂 刊本	1869 年 清刊本	1871 年 清刊	1864 年 日本版	○	明刊本	—	1887 年 清刊	1887 年 清刊	1843 年 日本刊	1844 年 重刊	1844 年 重刊	明應請 李氏刊	1524 年 明刊	1603 年 明刊	○	清光緒 22 年刊						
鎌倉大学附 属 図書館	×	1668 年 清刊	1884 年 刊	—	—	1818 年 日本版	—	○	明萬曆 国子監本	—	1629 年 明刊 有補号	—	△	1860 年 日本版	1607 年 明刊	1642 年 明刊	△	鬱岡山房 明刊	1606 年 序刊	1846 年 日本刊	1846 年 重訂	—	1524 年 明刊	—	1896 年 刊本							
関西大学附 属 図書館	×	文化 2 年 官版	年代不明 写本	△	1910 年 清刊本	1818 年 日本版	1822 年 清版	—	—	△	1625 年 明刊 現 61 冊	1811 年 清刊	1864 年 日本版	1871 年 日本刊	—	金屋清古 刊	1606 年 序刊	1658 年 清刊	1846 年 序刊	1896 年 清刊	○	明刊本	—	—	○	清光緒 8 年刊						
名古屋市中 区文庫	△	江戸末期 刊 132 ～ 200 巻欠	—	—	—	—	△	明南監本 230 巻闕	—	○	1625 年 明刊	○	明刊	1626 年 序刊	1574 年 明刊	○	明萬曆刊	1605 年 明刊	—	1658 年 清刊	×	聖武記 探要	△	1539 年 明刊	○	1524 年 明刊	—	—				
東京都立 中央図書館	×	文化 5 年 刊	△	1884 年 刊	×	民国写本	1818 年 日本版	△	1878 年 清刊本	○	明萬曆 刊本	△	嘉永 6 年 日本版	1836 年 日本刊	—	1864 年 日本版	△	清刊本	△	鬱岡山房 清刊	1605 年 明刊	—	△	鬱岡山房 清刊	1842 年 序刊	1896 年 清刊	△	明刊本	○	1603 年 序明刊	○	清道光 7 年刊
山口大学 附属 図書館	×	1772 年 勅撰刊本 35.36.190 ～200 巻 欠	—	—	×	1820 年 日本版	—	○	明萬曆 国子監本	清雍正 刊	1629 年 明刊	—	△	1629 年 明刊	明治 8 年 刊本	×	1843 年 日本刊	△	1846 年 琉璃殿刊	—	1524 年 明刊	—	—	○	清道光 6 年刊							
宮城県立 図書館	△	乾隆 清刊本	—	—	—	—	△	明萬曆 北監本 三國志遼 史闕	清敬慎堂 刊本 116 巻闕	×	1849 年 日本刊	△	朝鮮版	1864 年 日本版 欠巻多数	○	論正 明刊本	—	○	明刊本	明刊本	—	×	聖武記 探要	△	明應請 李氏刊	1521 年 明刊	1603 年 序明刊	—				
鹿児島大学 附属 図書館	○	1772 年 勅撰刊本	—	—	×	1818 年 日本版	—	○	明萬曆 国子監本	—	1836 年 日本刊	—	△	1864 年 日本版	—	—	○	明官版	—	1843 年 日本刊	×	1844 年 重刊	△	1859 年 清刊	△	1859 年 清刊	—	—				
和歌山大学 紀州藩文庫	—	—	—	—	×	1925 年 刊	—	—	×	1836 年 日本刊	—	—	×	1860 年 日本版 70 ～ 157 巻欠	—	—	—	—	×	聖武記 探要	△	1539 年 明刊	○	1630 年 明刊	○	1603 年 明刊	—					
佛教大学附 属 図書館	—	△	1884 年 刊	—	×	清光緒版	1925 年 刊	—	—	×	1836 年 日本刊	—	—	—	—	—	—	△	1844 年 重刊	○	1859 年 清刊	○	明刊	—	—							
佐賀県立 図書館	×	版本不明	—	—	—	—	—	×	1836 年 日本刊	—	×	1864 年 日本版	—	—	—	×	1843 年 日本刊	○	清 古微堂刊	×	清刊	○	明刊本	—	—							

※主に漢籍データベースを参考に作成。

※評価点数は初刊又はそれに準ずる版本を○＝2点。それに次ぐ版本を△＝1点。

[別表②]

海 保 青 陵						松原永年	菊池海莊		塩田順庵
善中談	萬家談	燹理談	富貴談	天王談	前識談	古碧吟社小彙	海莊集	遺山先生詩鈔	海防彙議
1806 年以前	1806 年以前	1806 年	1805 年	1806 年以前	1812 年以前	1829 年	1847 年	1836 年	1850 年頃
静嘉堂文庫	静嘉堂文庫	京都大学図書館	京大谷村昭和写本	京都大学図書館	京都大学図書館	関西大学図書館	国立国会図書館	慶応大学	伝存多数 60 件余
京都大学図書館	京都大学谷村文庫	静嘉堂文庫	無窮会平沼文庫	京都大学谷村文庫	京都大学谷村文庫		公文書館内閣文庫	東京大学図書館	
尊経閣文庫	尊経閣文庫	静嘉堂文庫		静嘉堂文庫			静嘉堂文庫	日比谷図加賀文庫	
	内藤記念くすり博物館						学習院大学図書館	西尾市岩瀬文庫	
							京都大学図書館	豊川市穂久邇文庫	
							慶応大学斯道文庫	早稲田大学図書館	
							早稲田大学図書館	岡山県立図書館	
							大阪府立図書館	国文学研究資料館	
							日比谷図書館 2 部	お茶の水大図 2 部	
							宮城県立図書館	東洋大学哲学堂	
							東大三井鴎軒文庫	法大正岡子規文庫	
							国文学研究資料館	大阪大学図書館	
							東京芸大脳本文庫 2 部	高梁市図桜井文庫	
							二松学舎大図書館	竹田市図由学館	
							新潟大佐野文庫 2 部	南丹市博小出文庫	
							関西大学長沢文庫	和歌山県立図書館	
							大阪天満宮		
							和歌山大学紀州藩文庫		
							ハーバード燕京図書館		
							和歌山県立図書館		
写本	写本	写本	写本	写本	写本		他 2 件		

全国所蔵状況調べ（和本 徂徠学派関係等）

	荻生徂徠				太宰春台				劉義慶撰 王世貞補
書名	鈐録	弁名	徂徠集	四家雋	産語	標箋孔子 家語	六経略説	春台先生 紫芝園稿	世説 新語補
成立（出版） 年	1727 年頃 刊	1740 年刊	1736 年序	1761 年	1749 年	1789 年刊	1745 年 序	1752 年	明末
所蔵機 関	伝存多数 125 件余	伝存多数 160 件余	伝存多数 115 件余	伝存多数 45 件余	伝存多数 65 件余	伝存多数 50 件余	伝存多数 55 件余	伝存多数 70 件余	伝存多数 130 件余
備 考									

主に日本古典籍総合データベース及び漢籍データベースを参考に作成。

軍 事 教 練 関 係 書 籍								
小林小太郎 訳	海軍所 近藤誠一郎	ベクマン 広瀬元恭訳	浅野敬徳訳	華盛頓兵学 校陸軍所訳	大島圭介	高島秋帆訳	高松観次郎 訳	著者又は 訳者
築城約説	海軍砲術 提要	築城新法	西洋火薬 便覧	山砲演式	手銃論	施条砲図説	軍用火料 新書	書名
1867 年	1866 年	1859 年	1867 年	1864 年	1867 年	1864 年	1867 年	成立 (出版) 年
高知県立 図書館	高知県立 図書館	旧海軍 兵学校	高知県立 図書館	高知県立 図書館	市立米沢図 興讓館文庫	東京国立 博物館	伝習館高校 対山館文庫	所 蔵 機 関
酒田市図書 館光丘文庫	酒田市図書 館光丘文庫	九州大学	旧海軍 兵学校	旧海軍 兵学校	酒田市図光 丘文庫 6 件	旧海軍 兵学校		
洲本市立 図書館		京都大学	黒羽芭蕉の館 作新館文庫	旧影考館 文庫	山口大学 樓息文庫	高知県立 図書館		
南丹市博 小出文庫		静岡県立 図葵文庫		島田貞一	東京大学 駒場図書館	早稲田 大学		
島根大附属 図書館		大阪府立 図書館		二松学舎大 図書館				
		礪川文庫		武雄歴史資 料館鍋島家 資料				
		横浜市大三 枝博吾文庫		黒羽芭蕉の館 作新館文庫				
		南丹市博小 出文庫 2 件		国会図書館				
		国会図書館						
								備考
軍 事 教 練 関 係 書 籍								
橋爪貫一訳	浅野敬徳訳		沢畑頼母訳	レース	牧天穆訳		七十一椿園 山本信有序	著者又は 訳者
英国歩操 新式	遠西火攻 精選撮要	英国歩兵操 則図抄	新式里尼教 練図解	攻守略説	和蘭官軍 歩操軌範	歩軍図解	西城 間見録	書名
1869 年	1854 年	1868 年	1967 年	1867 年	1855 年	1846 年	1800 年	成立 (出版) 年
中京大学 図書館	静嘉堂 文庫	京都学・ 歴彩館	市立弘前 図書館	高知県立 図書館	伝存多数 30 件余	宮内庁 書陵部	東京芸大脇 本文庫 2 部	所 蔵 機 関
静岡県立 図書館	杏雨書屋		福井県立 大野高校	旧浅野 図書館			金沢市図書 館稼堂文庫	
国立国会 図書館	酒田市図書 館光丘文庫			市立弘前 図書館 2 件			東京都図書 館村上文庫 2 件	
愛媛県立 図書館				加賀市図書 館聖藩文庫			宮城県立 図書館	
				黒羽芭蕉の館 作新館文庫			東北大学 図書館	
				島根大学 図書館			公文書館 内閣文庫	
							静嘉堂 文庫	
							東洋文庫	
							九州大学	
							関西大学	
							他 3 件	備考

全国所蔵状況調べ（和本 兵書関係等）

軍 事 教 練 関 係 書 籍									
著者又は 訳者	赤松小三郎 訳	雅骨不 微尔列木	和蘭總督監 卒籍珀子	内藤類治郎 訳	吉沢勇四郎 訳	伊東朴斎訳 陸軍所編	陸軍所訳	吉母波百兒 大島圭介訳	沢畑真雄訳
書名	重訂英国 歩兵練法	カエルストヒュー リッソ	練卒訓語	塊氏砲論	火功奏式	馬療新篇	兵学程式	築城典刑	英国小隊号 令詞
成立（出版） 年	1867 年	1829 年	安政 2 年頃	1866 年	1866 年	1866 年	1867 年	1860 年	1864 年
所蔵機 関	伝存多数 18 件余		伝存多数 27 件余	旧海軍兵 学校 2 部	東北大 狩野文庫	香川大学 神原文庫	公文書館 内閣文庫	東北大 狩野文庫	市立弘前 図書館
				静嘉堂 文庫	京都学・ 歴史館	京大富士川 文庫	静岡県立 図楽文庫	東京国立 博物館	
				青森県立 図書館	高知県立 図書館	高知県立 図書館	高知県立 図書館	東京大学	
				高知県立 図書館	お茶の水図 成養堂文庫	麻布大学白 井紅白文庫	市立米沢図 興譲館文庫	一橋大学	
				静岡県立 図楽文庫	無窮会 平沼文庫	国立国会 図書館	延岡 内藤家	静岡県立 図楽文庫	
				東京都 図諸家文庫	香川大学 神原文庫		酒田市図書 館光丘文庫	静嘉堂 文庫	
				酒田市図書 館光丘文庫	酒田市図書 館光丘文庫		福井市 図書館 3 件	宮内庁 書陵部	
				秋市図 和漢古書	関西大学 長沢文庫		高知城歴博 山内文庫	香川大学 神原文庫	
				伝習館高校 対山館文庫	久留米市民 図書館		ハーバード 燕京	九州大学	
				朝倉市秋月 博物館			黒羽芭蕉の 館作新館 文庫 4 件	慶応大学 幸田文庫	
備考	薩州軍局印 秋田屋太右 衛門	和蘭海陸 司砲		他 2 件				他 2 5 件	
軍 事 教 練 関 係 書 籍									
著者又は 訳者	ストレイ ト吉沢勇四郎				マクドウガル 渡部一郎訳	奥平陸橋訳	福沢諭吉訳	陸軍所訳	瓜生三寅抄 訳
書名	斯氏 築城典刑	炮術言葉 図説	野戦論	歩兵令詞	陸軍士官 必携	東軍要録	雷銃操法	官版 砲兵程式	歩操新書 増補
成立（出版） 年	1866 年	1854 年	1866 年	1867 年	1867 年	1866 年	1866 年	1867 年	1868 年
所蔵機 関	静嘉堂 文庫	東京国立 博物館	市立岩国 図書館	公文書館 内閣文庫	筑波大学	市立米沢図 興譲館文庫	国会 図書館	静岡県立図 書館楽文庫	福井市 図書館 7 件
	京都学・ 歴史館	京都大学	八戸市図八 戸青年文庫	京都学・ 歴史館	東北大学 狩野文庫	高知県立 図書館	慶応大学	高知県立 図書館	京都学・ 歴史館
	高知県立 図書館	慶応大学	福井市立 図書館	高知県立 図書館	静岡県立図 書館楽文庫	尊経閣 文庫	高知県立 図書館	内藤くすり 大同	
	尊経閣 文庫	宮城県図伊 達文庫 2 件	山口大学 棲息文庫	高知県立 図書館	旧彰考館 文庫	市立米沢図 興譲館文庫	市立米沢図 興譲館文庫	久留米市 図書館	
	学書言志	学書言志	久留米市立 図書館	市立米沢図 興譲館文庫	酒田市図書 館光丘文庫	旧海軍 兵学校	黒羽芭蕉の 館作新館文庫	愛知県立 図書館	
	酒田市図光 丘文庫 2 件	岡山大学 池田文庫	高知城歴博 山内文庫	天理 図書館	大洲市図矢 野玄道文庫	酒田市図書 館光丘文庫	山口大学 棲息文庫		
	福井市立 図書館	福井市立 図書館		国文学研究 資料館	新館文庫 2 件				
	関西大学 長沢文庫	九州大学 檜垣文庫		市立弘前 図書館	島根大学 図書館	朝倉市秋月 博物館			
	高梁市 図山田文庫	佐賀県図連 池鍋島文庫		酒田市図書 館光丘文庫	和歌山大学 図書館	佐賀県図連 池鍋島文庫			
	萩図書館 和漢古書	長崎大学 経済 2 件		加賀市 図聖潘文庫		武雄歴史資料 館鍋島家資料			
備考	他 4 件 陸軍所官版	早稲田大 五守館蔵板		英式操練	他 23 件		パークレー 東亜図 ハーバード 燕京		

主に日本古典籍総合データベース及び国立国会図書館サーチを参考に作成。

【関係年表】

和 暦	西暦換算	出 来 事	出 典
元禄十三年	1700 年	初代儀兵衛知直、銚子荒野に醤油店を開業。	ヤマサ醤油店史 22 頁
天明八年頃	1788 年頃	四代目儀兵衛教表、五島に出店。	ヤマサ醤油店史 68 頁
寛政三年三月	1791 年	異国船熊野大嶋浦へ来航。湯浅で鉄砲調べが行われる。	翻刻古歴概要 66 頁
寛政四年十月	1792 年	露西亜船紀州の漂流人を送還。これ以後外交始めて多事。	南紀徳川史巻二 424 頁
文化初年頃	1804 年頃	四代目儀兵衛、銚子の店を五代目恭に委ねる。	ヤマサ醤油店史 74 頁
文化四年四月	1807 年	蝦夷地御開発所ヲロシヤ船着騒動有り。	翻刻古歴概要 99 頁
文化十二年初	1815 年	五代目恭、地土申付けられる。	翻刻古歴概要 116 頁
文化十四年三月	1817 年	四代名儀兵衛教表逝去。享年七一。	ヤマサ醤油店史 70 頁
文政三年六月	1820 年	梧陵、紀伊国有田郡広村に生まれる。幼名七太。	濱口梧陵伝年譜 4 頁
文政四年正月	1821 年	梧陵の父、七右衛門逝去。享年二二。	濱口梧陵伝年譜 4 頁
天保二年九月	1831 年	十二歳。本家の嗣子となる。修業のため銚子に赴く。	濱口梧陵伝年譜 4 頁
天保二年頃	1831 年頃	五代目恭隠居。山平と称す。六代目保平当主襲名。	ヤマサ醤油店史 88 頁
天保五年五月	1834 年	十五歳。元服して、儀三郎と名を改めた。	浜口梧陵伝年譜 5 頁
天保八年十月	1837 年	五代目儀兵衛祖父恭逝去。享年六一	ヤマサ醤油店史 85 頁
天保十二～四年頃	1841-3 年頃	天保の改革が実施され、橋本柑園が倒産する。	談欄巻四 12-3 頁
弘化丁未年	1847 年	信州で地、大いに震う。(善光寺地震)	梧陵文庫『水経注』
嘉永三年頃	1850 年	梧陵、佐久間象山に入門する。	濱口梧陵伝年譜 9 頁
嘉永四年	1851 年	梧陵、広村崇義団を起こす。	濱口梧陵伝年譜 9 頁
嘉永五年	1852 年	梧陵、広村に稽古場を設け村内の青年子弟を教育(耐久社の起源)。	濱口梧陵伝 63 頁
嘉永六年三月	1853 年	梧陵、七代目襲名。四月六代目保平逝去。享年五五。	ヤマサ醤油店史 99 頁
安政元年十一月	1854 年	広村に海嘯来襲。梧陵これを全力を挙げて救済する。	濱口梧陵伝年譜 10 頁
安政二年二月	1855 年	窮民救済のため事業を起し、私費で築堤工事を開始。	濱口梧陵伝 118 頁
安政二年	1855 年	梧陵、浦組を組織し訓練を行う。	濱口梧陵伝年譜 10 頁
安政三年十二月	1856 年	梧陵、窮民救済等の功績により独礼格を賜る。	濱口梧陵伝 142-3 頁
安政五年	1857 年	コレラ大流行。梧陵は関寛斎に治療を学ばせ銚子の流行を防止。	濱口梧陵伝 165-7 頁
安政五年 12 月	1858 年	築堤工事を終える。	濱口梧陵伝 119 頁
安政六年	1858 年	梧陵、種痘館再興の爲に金三百両を寄附する。	濱口梧陵伝年譜 11 頁
慶応二年	1866 年	梧陵、耐久社を創設。	濱口梧陵伝 311 頁
明治元年十二月	1869 年	梧陵、勘定奉行に抜擢され、和歌山藩政に参画する。	濱口梧陵伝 221-2 頁
明治二～四年	1869-71 年	藩政改革に伴い参政に任ぜられ、学習館知事等を歴任。	濱口梧陵伝 268-9 頁
明治四年七月八月	1871 年	梧陵、駅逓正に任ぜられ、八月駅逓頭に任ぜらる。	濱口梧陵伝 263 頁
明治十三年	1880 年	梧陵、県会開設と共に最初の和歌山県会議長に当選。	濱口梧陵伝年譜 16 頁
明治十五年	1882 年	梧陵、木國同友会を組織する。	濱口梧陵伝年譜 17 頁
明治十八年	1885 年	梧陵、米国ニューヨークで客死。	濱口梧陵伝年譜 17 頁
明治二六年四月	1893 年	勝海舟撰文の『浜口梧陵君碑』が広八幡神社に建立される	濱口梧陵伝 2-5 頁
明治三〇年	1897 年	ラフカディオハーンが物語『生ける神』を発表。	濱口梧陵伝 152-3 頁
大正九年四月	1920 年	和歌山県最初の銅像として県会議事堂前に梧陵像が建立。	濱口梧陵伝 402 頁
昭和十二年	1937 年	物語『稲むらの火』が国語の国定教科書に採用される。	稲むらの火の文化史 71 頁
昭和二一年一二月	1946 年	昭和の南海地震発生。広川市街地は津波堤防に守られる。	広川町誌上巻 166 頁